県営ほ場整備事業（大海地区）に係る埋蔵文化財発掘調査報告書

宝達志水町

冬野遺跡・免田一本松遺跡

２００５

石　川　県　教　育　委　員　会

(財)石川県埋蔵文化財センター

冬野遺跡・免田一本松遺跡

ふゆ の　めん でん いっ ぽん まつ

２００５

石　川　県　教　育　委　員　会

(財)石川県埋蔵文化財センター

宝達山からのぞむ遺跡周辺

冬野遺跡Ｂ区 SK06

冬野遺跡Ｂ区 SI01土層

冬野遺跡Ｂ区 SI01

例　言

1　本書は冬野遺跡・免田一本松遺跡の発掘調査報告書である。

2　遺跡は宝達志水町冬野地内である。

3　調査原因は県営ほ場整備事業（北大海地区）であり、同事業を所管する石川県農林水産部農業基盤整備課（旧農地整備課）が石川県教育委員会に発掘調査を依頼したものである。

4　調査は財団法人石川県埋蔵文化財センターが石川県教育委員会から委託を受けて、平成14年（2002）年度から平成16（2004）年度にかけて実施した。業務内容は現地調査、出土品整理、報告書刊行である。

5　調査にかかる費用は、石川県農林水産部農業基盤整備課と、文化庁の補助を受けた石川県教育委員会が負担した。

6　現地調査は平成14（2002）年度に実施した。期間・面積・担当課・担当者は下記のとおりである。

期　間　平成14（2002）年９月18日～同年12月24日

面　積　冬野遺跡　510㎡

免田一本松遺跡　60㎡

担当課　調査部調査第２課

担当者　本田秀生（調査専門員）、林　大智（主事）、谷内明央（主事）

7　出土品整理は平成15年度に実施し、企画部整理課が担当した。

8　報告書の刊行は平成16年度に実施し、調査部調査第２課が担当した。執筆、編集は本田秀生（調査部調査第２課調査専門員）が行った。

9　調査には下記機関の協力を得た。

石川県農林水産部農業基盤整備課、中能登農林総合事務所（旧羽咋農林総合事務所）、宝達志水町教育委員会

10　調査に関する記録と出土品は石川県埋蔵文化財センターで保管している。

11　本書についての凡例は下記のとおりである。

（1）方位は真北である。

（2）水平基準は海抜高であり、Ｔ．Ｐ．（東京湾平均海面標高）による。

目　　次

第１章　調査に至る経緯と経過 …… 1

第１節　調査に至る経緯 …… 1

第２節　調査の経過 …… 1

第２章　遺跡の位置と周辺の遺跡 …… 4

第１節　遺跡の位置 …… 4

第２節　周辺の遺跡 …… 5

第３章　冬野遺跡 …… 8

第１節　概　　要 …… 8

第２節　遺構と遺物 …… 8

１．Ａ　　区 …… 8

２．Ｂ　　区 …… 9

３．Ｃ　　区（第14～15、18図） …… 10

４．Ｄ区・試掘調査区（第16～18図） …… 11

５．その他の遺物（第19図） …… 11

第３節　小　　結 …… 11

第４章　免田一本松遺跡 …… 28

挿図目次

第１図　調査区位置図 …… 3

第２図　遺跡の位置 …… 4

第３図　周辺の遺跡 …… 6

第４図　Ａ区遺構実測図(1) …… 12

第５図　Ａ区遺構実測図(2) …… 13

第６図　Ａ区遺構実測図(3) …… 14

第７図　Ａ区遺物実測図 …… 15

第８図　Ｂ区遺構実測図(1) …… 16

第９図　Ｂ区遺構実測図(2) …… 17

第10図　Ｂ区遺構実測図(3) …… 18

第11図　Ｂ区遺構実測図(4) …… 19

第12図　Ｂ区遺物実測図(1) …… 20

第13図　Ｂ区遺物実測図(2) …… 21

第14図　Ｃ区遺構実測図(1) …… 22

第15図　Ｃ区遺構実測図(2) …… 23

第16図　Ｄ区遺構実測図(1) …… 24

第17図　Ｄ区遺構実測図(2)・試掘抗土層図 …… 25

第18図　Ｃ区・Ｄ区・試掘抗遺物実測図 …… 26

第19図　冬野遺跡採集遺物実測図 …… 27

第20図　免田一本松遺跡・遺構・遺物実測図 …… 28

表 目 次

第１表　遺跡地名表…… 7
第２表　土器観察表……29
第３表　石器、金属器、木器計測表……30

図版目次

図版１　航空写真（昭和61年）
　　冬野遺跡・免田一本松遺跡（昭和61年）
　　冬野遺跡（昭和61年）
図版２　航空写真（昭和61年）
　　冬野遺跡（昭和61年）
　　免田一本松遺跡（昭和61年）
図版３　遺構(1)
　　冬野遺跡Ａ区（西から）
　　冬野遺跡Ａ区（東から）
図版４　遺構(2)
　　冬野遺跡Ｂ区（南から）
　　冬野遺跡Ｂ区（南側）（北から）
図版５　遺構(3)
　　冬野遺跡Ｂ区（北側）（北から）
　　冬野遺跡Ｃ区（東から）
図版６　遺構(4)
　　冬野遺跡Ｄ区（東から）
　　免田一本松遺跡（東から）
図版７　遺構(5)
　　免田一本松遺跡（西から）
　　冬野遺跡Ａ区調査前　　冬野遺跡Ｂ区調査前
　　冬野遺跡Ｃ区調査前　　冬野遺跡Ｄ区調査前
図版８　遺構(6)
　　Ａ区 SD01　　Ａ区 SD01土層
　　Ａ区 SK01　　Ａ区 SK01土層
　　Ａ区 SK02土層　　Ａ区 SK02土層
　　Ａ区 SK03　　Ａ区 SK03土層
図版９　遺構(7)
　　Ａ区 SK04　　Ａ区 SK04土層
　　Ａ区 SK09　　Ａ区 SX01
　　Ｂ区 SI01床面　　Ｂ区 SI01床面
　　Ｂ区 SI01　　Ｂ区 SI01壁溝内遺物

図版10　遺構(8)
Ｂ区 SI01床面下面　Ｂ区 SI01土層
Ｂ区 SI02　Ｂ区 SI03
Ｂ区 SI03焼土面　Ｂ区 SI03焼土面
Ｂ区 SK05　Ｂ区 SK07
図版11　遺構(9)
Ｂ区 SK08　Ｂ区 SK10
Ｂ区 SK06　Ｂ区 SK06土層
Ｃ区作業風景　Ｃ区出土遺物
Ｄ区作業風景　試掘調査作業風景
図版12　遺構(10)
調査区から望む宝達山　試掘抗 NO. 1 土層
試掘抗 NO. 2 土層　試掘抗 NO. 3 土層
免田一本松遺跡より望む冬野遺跡　冬野遺跡丘陵裾土器出土地点
冬野遺跡丘陵裾土器出土地点　冬野遺跡丘陵裾土器出土状況
図版13　遺構(11)
免田一本松遺跡調査前　免田一本松遺跡表土除去作業
免田一本松遺跡作業風景　免田一本松遺跡作業風景
免田一本松遺跡調査区　免田一本松遺跡調査区土層
免田一本松遺跡 P01土層　免田一本松遺跡 P01
図版14　遺物(1)
出土遺物(1)
図版15　遺物(2)
出土遺物(2)
図版16　遺物(3)
出土遺物(3)
図版17　遺物(4)
出土遺物(4)
図版18　遺物(5)
出土遺物(5)

第１章　調査に至る経緯と経過

第１節　調査に至る経緯

冬野遺跡・免田一本松遺跡は昭和61年に国道159号押水バイパス建設の際発掘調査が実施されている。今回の発掘調査は県営ほ場整備事業（北大海地区）に伴うものである。平成13年２月27・28日に県農林水産部農業基盤整備課の依頼を受けた県教育委員会文化財課が対象地域の試掘調査を実施し、事業地内で遺跡の広がりを確認している。この結果を基に両者で協議が持たれ、排水路、パイプライン敷設工事で遺跡の破壊される部分について発掘調査を実施することとなった。

発掘調査は県教育委員会から委託を受けた財団法人石川県埋蔵文化財センターが、平成14年９月18日から同年12月24日にかけて実施した。調査面積は冬野遺跡が510㎡、免田一本松遺跡が60㎡である。

第２節　調 査 の 経 過

９月中旬に現地打ち合わせを実施した。調査は免田一本松遺跡から実施することとし、９月18日から重機による表土除去作業を開始することとなった。また、この時、冬野遺跡発掘調査箇所の内押水バイパス東側調査箇所の工事について、パイプライン敷設位置をずらして現況水路部分を利用し、遺跡の保護が図れないか打診している。

免田一本松遺跡調査区表土除去作業は、工事工程の関係から表土を調査区の横に置くことができず、キャリアダンプを使用して調査区西側に移動させたため、思いのほか時間がかかった。また、調査地点は丘陵と低地部の境にあたり、農道の開削によってかなり削平を受け、また、低地部にかかる部分からは湧水がかなりみられた。丘陵裾に位置するため、斜面上方からの雨水に対する対策も必要となり、20日から作業員を導入し、まず周辺の整備に取りかかった。25日には遺構の掘削を開始したが、その多くが近代以降の所産であった。唯一中央部で土坑を１基確認した。調査中に冬野遺跡調査区真下の丘陵裾部から遺物を採集している。９月いっぱいで調査を終了したが、免田一本松遺跡の調査担当者の一人であった谷内が調査からはずれ、冬野遺跡の調査は林が加わることになった。

冬野遺跡の調査区は台地上をコの字状にめぐり、免田一本松遺跡側をＡ区、丘陵を横断するものをＢ区、前田川に面する部分をＣ区とした。また、Ｃ区下の低地部をＤ区として調査を進めることとした。10月３日に表土除去作業を実施している。押水バイパス側からの進入路が確保できず、重機は免田一本松遺跡調査区をとおり、冬野遺跡の展開する丘陵の先端部から進入することとなった。また、仮設建物も資材の搬入路が確保できず、とりあえず免田一本松の仮設建物から通う形で調査を進めることとなった。仮設建物設置場所は押水バイパス東側の調査区の取り扱い決定後、決めることになった。

遺跡は削平を受け、Ｂ区北端を除き、耕作土を除去すると赤土のベース面となるが、雨が降ると耕作土とベース面の境から水が染み出し調査区が水浸しとなった。この水の染み出しは一度雨が降ると３日ぐらい続き、手戻りの多い調査を実施することとなった。このような状況から遺構検出に時間を要し、やっと10月中旬にＡ区の遺構掘削に取りかかっている。遺構は落し穴と溝を確認している。どちらも深さがあり、排水しながらの遺構掘削はつらいものがあった。

10月後半からはＢ区の調査に取りかかっている。南側は南端の土坑を除けば深い遺構は少なかった

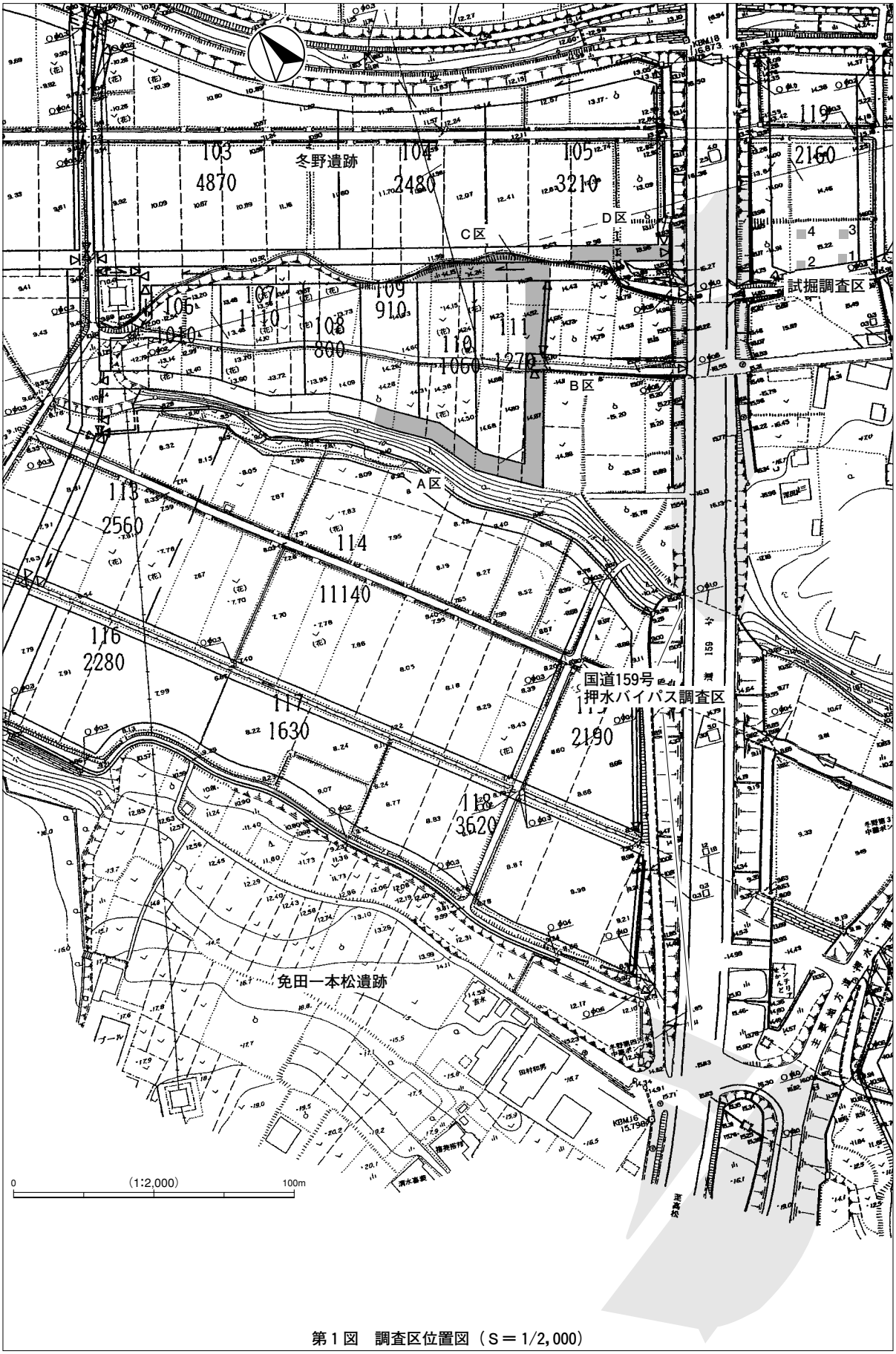
が、北側は、弥生時代の大型土坑や竪穴住居跡を確認している。水の染み出しは相変わらずである。

10月終わりに押水バイパス東側のパイプラインは既存水路を利用して埋設することが決定した。また、設計変更となったバイパス東側に隣接する地区については、盛土して保存を図ることとなった。その資料を得るため試掘調査を実施することなり、30日に実施している。仮設建物は設置場所が確保できず、テントを設営しこれを当てることとなった。

Ｂ区では竪穴住居跡を３棟確認した。うち２棟は削平が著しく、壁溝や、柱穴を確認するにとどまったが、調査区北端で確認したSI01跡は傾斜面に構築されていたため、削平を免れ上部の遺存状態はよかった。上面からは古墳時代後期の土器片が出土したが、床面付近からは弥生時代後期の土器が出土している。

11月中旬からはＣ区の調査を開始している。Ｃ区では柱穴等を確認したものの大形の遺構は確認できなかった。SI01跡は貼り床がなされており、サブトレンチを設け確認したところ、床面下に壁溝を確認し、上面を実測した後貼り床を除去し、下面の遺構の検出を行っている。壁溝は２本確認し２回以上の建て替えが行われていることが判明した。11月終わりまでＢ、Ｃ区の遺構掘削を行った。

12月に入りＤ区の調査を開始した。隣接した既存の水路から水が調査区に流れ込むためその対策をまず行い、調査に取りかかっている。押水バイパスに近い部分では小穴等の遺構を確認したものの下手半分が低地部にかかり遺構は確認できなかった。12月中旬までには遺構掘削をほぼ終了したが、この頃から雪が降り出し、実測作業や写真撮影に支障をきたすようになった。12月13日には実測作業を終了し、17日に機材を撤収、24日に現地を引き渡し調査を終了した。遺物整理は平成15年度に実施し、平成16年度に報告書の作成、刊行を行った。



第１図　調査区位置図（Ｓ＝1/2,000）

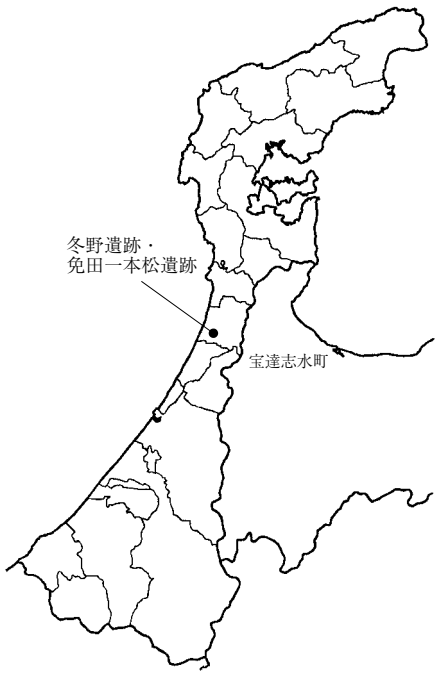
第２章　遺跡の位置と周辺の遺跡

第１節　遺 跡 の 位 置

冬野遺跡、免田一本松遺跡は、石川県羽咋郡宝達志水町冬野地内に位置する。宝達志水町は平成17年３月１日に押水町、志雄町が合併し誕生した。

宝達志水町は南北に長い石川県の中央やや北に位置し、古くは能登国の南端に位置していた。遺跡はこの宝達志水町の南西部、旧押水町冬野地内に広がっている。

旧押水町は総面積53.42平方キロメートル、東西約10㎞、南北約７㎞、東は富山県福岡町、南は旧高松町（現在かほく市）、北は旧志雄町と接している。



第２図　遺跡の位置

町域の東には、石動山系とともに能登半島の背骨となり、富山県との境を成す宝達山系がある。山地はそこから西に向い高度を下げつつ丘陵地へと続く。宝達山系からは、南から大海川、前田川、大坪川、杓田川、宝達川、相見川などの河川が流れ出し小扇状地が形成され、これが開析され丘陵地の前面部を形成している。丘陵地と日本海の間には３列の砂丘と、その後背地である低地部が間を埋めている。遺跡の立地する地点は、丘陵地が尾根状に低地部に飛び出した部分で、小さな谷を挟んで相対している。両者とも尾根の南西側は崖となり、遺跡の展開する丘陵上面は北東に緩やかな傾斜を持つ。

町域は山林が最も多く、宝達山山頂付近のブナ林は低山帯のブナ林として広く知られ、山麓斜面は古くは薙畠として利用されていたという。現在では丘陵地との境付近に、世界初のクローン牛が誕生したことで有名な石川県畜産総合センターや県農業短大付属経営農場が開かれている。ついで面積を占める水田は、近年、区画の大型化、用排水の整備を主眼とした整備が進められている。今回の調査もそれに伴うものである。他には花木の栽培が盛んで、また、イチジクやそれを加工したジャム、ワイン、紋平柿、変わったところでは葛粉が宝達葛として特産品となっている。

集落は、砂丘地の背後、丘陵上、山裾に分布しており、低地部中央には古くからの集落は少ない。人口は、平成12年の資料によれば8,543人で減少傾向にある。調査を実施したおりにも、最近空き家が増えて、と言うような話を作業員の方からうかがっている。

主要交通路は砂丘の頂部に能登有料道路、砂丘背後に旧国道とJRが走り、山麓には国道471号が山裾の集落を結んでいる。この間には国道159号押水バイパスが町域を貫いている。

遺跡は、昭和61年に前述の国道159号押水バイパス建設に伴い発掘調査が実施され、冬野遺跡では弥生時代～古代の集落跡が、免田一本松遺跡では弥生～古墳時代の集落跡、冬野小塚古墳群中の古墳３基が調査されている。今回の調査地点は、両遺跡ともバイパスの海側で、冬野遺跡については一部バイパスの山側の試掘調査も行っている。

第２節　周 辺 の 遺 跡

周辺には、県内で初めて縄文時代以前の遺跡が確認された御館遺跡があり、また、宿向山遺跡、宿東山遺跡、竹生野遺跡など同時代の遺跡の発掘調査事例もある。後者はいずれも国道159号押水バイパスの発掘調査で確認され、隣り合う丘陵部に遺跡が形成され、どの遺跡も台形様石器をその石器組成に含んでいる。免田一本松遺跡では同じバイパスの調査で石刃が出土している。

縄文時代は、その前半期の様相が明確でない。他の時代の遺物とともに数点の土器が出土する、あるいは落し穴が確認され、その周辺からわずかな土器が出土する事例が確認されるのみである。

中期からは集落跡などの調査事例がある。東間坂手山遺跡では中期初頭新保式期の竪穴住居跡が確認されている。免田一本松跡では、中期前葉の土器がまとまって出土している。後半～後期初頭では、紺屋町ほんでん遺跡がある。粘土貼の遺構が確認されているが、竪穴住居跡の貼床の可能性があろう。

後期では上田うまばち遺跡があり、県内では事例の少ない中葉の好資料が出土している。後期～晩期では紺屋町ダイラクボウ遺跡があり、丘陵裾部で貯蔵穴がまとまって検出されている。晩期では、前述の紺屋町ダイラクボウ遺跡以外には調査事例がないものの、東間たけのこし遺跡が知られている。

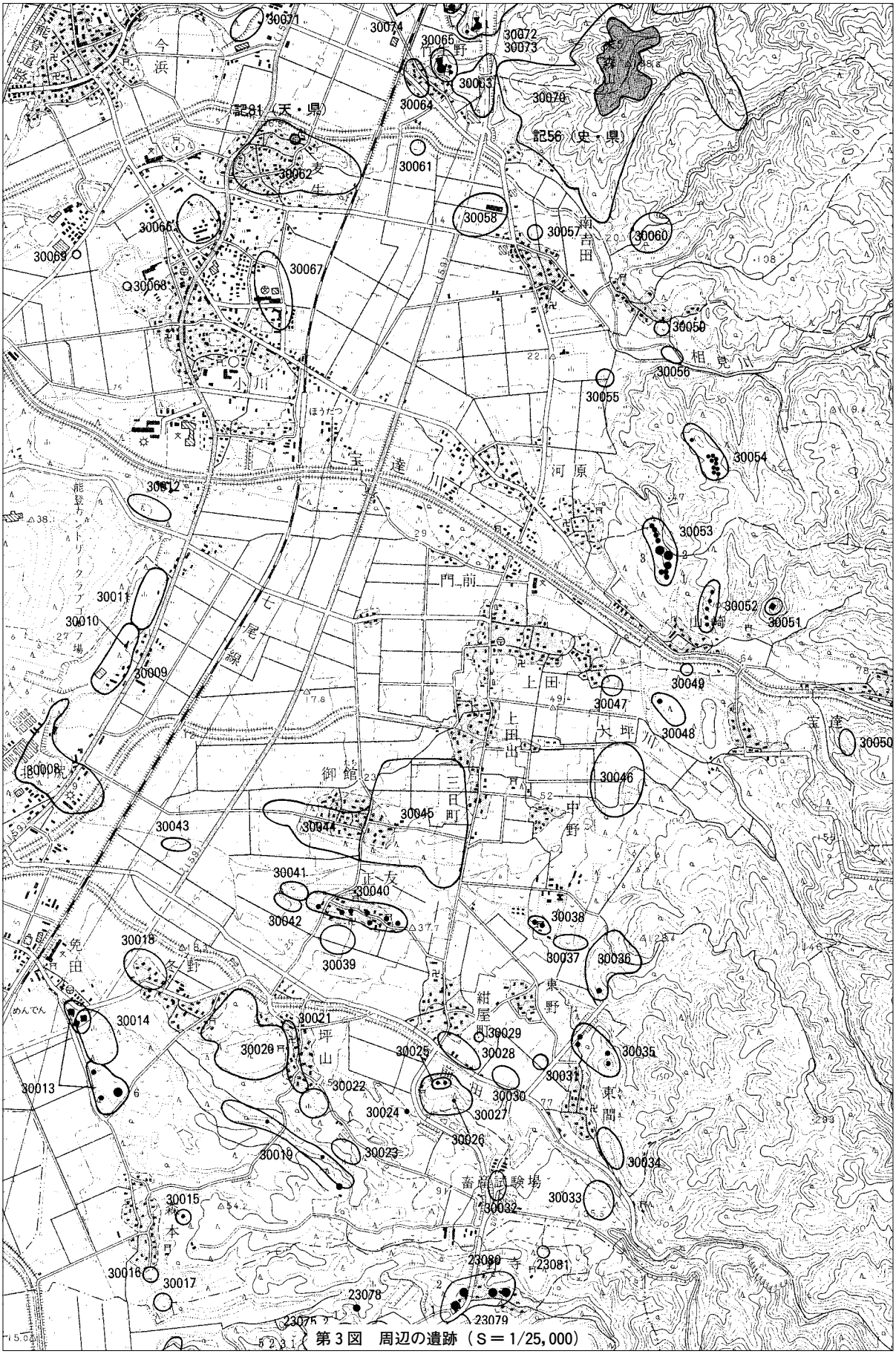
弥生時代は後期まで明瞭な遺構が確認された調査事例はない。北川尻おさの山遺跡、竹生野トリゲ山遺跡で土器片が採集されている。

後期後半～古墳時代は調査事例も多い。前述の宿向山遺跡、宿東山遺跡、竹生野遺跡では、丘陵尾根上に集落が形成されている。同じような丘陵上に立地しながら微妙に内容が異なる。冬野遺跡では弥生～古墳時代の竪穴住居跡、掘立柱建物と弥生時代の大型土坑が確認されている。免田一本松遺跡では、弥生～古墳時代の竪穴住居跡、掘立柱建物が確認されるものの、大型土坑は確認されていない。この両者も谷を隔てて隣接しておりその関係を問われるところだが、冬野遺跡の今回の調査で古墳時代後期と思われる竪穴住居跡が確認され、遺構の上からも同時並存が確認された。他には南吉田葛山遺跡などが調査されている。

古墳は国道159号押水バイパスに伴う調査で冬野小塚古墳群の内３基が調査されている。１号墳は半壊状態であったが、墳丘裾で１辺20m程の方墳と確認された。宿東山遺跡では全長約21mの前方後円墳である宿東山１号墳と径13mの円墳である２号墳が調査されている。１号墳からは後漢鏡が出土している。他には、竹生野天皇山古墳が知られているが、古墳は、山麓裾部や低地部に張り出す丘陵頂部に構築されるようである。砂丘地では、古墳の確認例はないが、大海川河口から埴輪が採集されている。

古代では、冬野遺跡や紺屋町七十苅遺跡で掘立柱建物群が検出されている他は、竪穴住居跡を主体とするようである。北川尻ほしば山遺跡では27棟の竪穴住居跡が確認され、宿向山遺跡、宿東山遺跡でも竪穴住居跡が確認されている。時代的には掘立柱建物群が後出傾向にある。また、７世紀からは押水・高松古窯跡群が操業を開始している。古窯跡群は南群と北群に分けられるが北群から操業を開始し、８世紀後半あたりから南群に転換していくようである。近辺では正友ヤチヤマ窯跡が調査され、８世紀の階段状床面を持つ窯跡が確認されている。

中世では近年、古くから有名な御館館跡が調査され、巨大な堀や縄張りなどが明らかとなっている。また、前述の紺屋町七十苅遺跡でも中世の集落跡が確認されている。末森城跡は佐々成正と前田利家の武将奥村永福らが戦ったいわゆる末森合戦の舞台となった地で、NHK の大河ドラマに登場し広く知られるようになった。



第３図　周辺の遺跡（Ｓ＝1/25,000）

遺跡番号	名　　称	所　在　地	種別	時　代
23075	八野ウワノ遺跡	かほく市八野	散布地	縄文
23078	八野アカサカ窯跡	かほく市八野	窯跡	奈良･平安
23079	野寺Ａ遺跡	かほく市野寺	散布地	縄文
23080	野寺１号窯跡	かほく市野寺	窯跡	古墳
	野寺２号窯跡	かほく市野寺	窯跡	古墳
	野寺３号窯跡	かほく市野寺	窯跡	不詳
	野寺４号窯跡	かほく市野寺	窯跡	不詳
23081	野寺尼塚	かほく市野寺	経塚	不詳
30008	北川尻おさの山遺跡	宝達志水町北川尻	散布地	弥生･古墳
30009	上田出西山遺跡	宝達志水町上田出	散布地	弥生～平安
30010	米出ドダヤマ中世墓	宝達志水町米出	墳墓	中世
30011	堂田遺跡	宝達志水町堂田	散布地	奈良～平安
30012	小川Ａ遺跡	宝達志水町小川	散布地	不詳
30013	冬野小塚１号墳	宝達志水町免田	古墳	古墳
	冬野小塚２号墳	宝達志水町免田	古墳	古墳
	冬野小塚３号墳	宝達志水町森本	古墳	古墳
	冬野小塚４号墳	宝達志水町冬野	古墳	古墳
	冬野小塚５号墳	宝達志水町森本	古墳	古墳
	冬野大塚古墳	宝達志水町森本	古墳	古墳
30014	免田一本松遺跡	宝達志水町免田	集落跡	旧石器～古墳
30015	森本ドウソバ遺跡	宝達志水町森本	中世墳	中世
30016	森本Ｂ遺跡	宝達志水町森本	散布地	奈良･平安
30017	森本Ａ遺跡	宝達志水町森本	散布地	奈良･平安
30018	冬野遺跡	宝達志水町冬野	散布地	縄文～平安
30019	冬野オオクボ１号窯跡	宝達志水町冬野	窯跡	奈良
30020	坪井山砦跡	宝達志水町坪山	砦跡	中世
30021	坪山横穴群	宝達志水町坪山	横穴墓	古墳
30022	坪山みやの田遺跡	宝達志水町坪山	散布地	不詳
30023	坪山あかさか窯跡	宝達志水町坪山	窯跡	奈良
30024	紺屋町むかいの窯跡	宝達志水町紺屋町	窯跡	古墳
30025	紺屋町天神山横穴群	宝達志水町紺屋町	横穴墓	古墳
30026	紺屋町飯塚古墳	宝達志水町紺屋町	古墳	古墳
30027	紺屋町ダイラクボウ遺跡	宝達志水町紺屋町	寺院跡	縄文･平安･中世
30028	紺屋町ほんでん遺跡	宝達志水町紺屋町	散布地	縄文･古墳･中世
30029	岡部館跡	宝達志水町紺屋町	館跡	不詳
30030	東間たけのこし遺跡	宝達志水町東間	散布地	縄文
30031	東間ほりがいち遺跡	宝達志水町東間	散布地	縄文
30032	紺屋ひらき遺跡	宝達志水町紺屋町	散布地	縄文
30033	東間さかて山遺跡	宝達志水町東間	集落跡	縄文
30034	東間ヨウショウジ遺跡	宝達志水町東間	散布地	奈良～中世
30035	東間宝殿山１号墳	宝達志水町東間	古墳	古墳
	東間宝殿山２号墳	宝達志水町東間	古墳	古墳
	東間宝殿山３号墳	宝達志水町東間	古墳	古墳
	東間宝殿山４号墳	宝達志水町東間	古墳	古墳
30036	正友ヤチヤマ窯跡	宝達志水町東野	窯跡	奈良
30037	東野Ｂ遺跡	宝達志水町東野	散布地	不詳
30038	御館ヘライバシ窯跡	宝達志水町御舘	窯跡	奈良～平安
30039	正友じんとくじま遺跡	宝達志水町正友	散布地	縄文･古墳
30040	正友１号墳	宝達志水町正友	古墳	古墳
	正友２号墳	宝達志水町正友	古墳	古墳
	正友３号墳	宝達志水町正友	古墳	古墳
	正友４号墳	宝達志水町正友	古墳	古墳
	正友５号墳	宝達志水町正友	古墳	古墳
	正友６号墳	宝達志水町正友	古墳	古墳
30041	正友火葬場台地遺跡	宝達志水町正友	散布地	縄文
30042	正友はちじがり遺跡	宝達志水町正友	散布地	縄文

遺跡番号	名　　称	所　在　地	種別	時　代
30043	坪山かわだ遺跡	宝達志水町坪山	散布地	縄文
30044	御館遺跡	宝達志水町御館	散布地	旧石器～中世
30045	御館館跡	宝達志水町御館	館跡	中世
30046	上田うまばち遺跡	宝達志水町上田	集落跡	縄文
30047	上田地頭方遺跡	宝達志水町上田	散布地	縄文
30048	上田狐塚古墳	宝達志水町上田	古墳	古墳
30049	上田永畑遺跡	宝達志水町上田	散布地	不詳
30050	宝達中上野遺跡	宝達志水町宝達	散布地	縄文
30051	山崎中世墳墓	宝達志水町山崎	墳墓	中世
30052	山崎横穴群	宝達志水町山崎	横穴墓	古墳
30053	河原三つ子塚１号墳	宝達志水町河原	古墳	古墳
	河原三つ子塚２号墳	宝達志水町河原	古墳	古墳
	河原三つ子塚３号墳	宝達志水町河原	古墳	古墳
	河原三つ子塚４号墳	宝達志水町河原	古墳	古墳
	河原三つ子塚５号墳	宝達志水町河原	古墳	古墳
	河原三つ子塚６号墳	宝達志水町河原	古墳	古墳
	河原三つ子塚７号墳	宝達志水町河原	古墳	古墳
	河原三つ子塚８号墳	宝達志水町河原	古墳	古墳
	河原三つ子塚９号墳	宝達志水町河原	古墳	古墳
	河原三つ子塚10号墳	宝達志水町河原	古墳	古墳
30054	南吉田向山中世墳群	宝達志水町南吉田	墳墓	中世
30055	南吉田堂の後遺跡	宝達志水町南吉田	散布地	古墳
30056	南吉田堂の庭遺跡	宝達志水町南吉田	散布地	古墳
30057	南吉田穴田遺跡	宝達志水町南吉田	散布地	不詳
30058	南吉田葛山遺跡	宝達志水町南吉田	散布地	古墳～中世
30059	南吉田古屋敷遺跡	宝達志水町南吉田	散布地	不詳
30060	南吉田サンマイ遺跡	宝達志水町南吉田	散布地	平安～中世
30061	麦生かわだ遺跡	宝達志水町麦生	散布地	不詳
30062	麦生遺跡	宝達志水町麦生	散布地	不詳
30063	竹生野遺跡	宝達志水町竹生野	集落跡	旧石器～中世
30064	竹生野フルヤシキ遺跡	宝達志水町竹生野	散布地	古墳～中世
30065	竹生野天皇山１号墳	宝達志水町竹生野	古墳	古墳
	竹生野天皇山２号墳	宝達志水町竹生野	古墳	古墳
	竹生野天皇山３号墳	宝達志水町竹生野	古墳	古墳
30066	合浜新保山遺跡	宝達志水町今浜	散布地	縄文･奈良
30067	合浜墓田山遺跡	宝達志水町今浜	散布地	奈良～平安
30068	合浜Ａ遺跡	宝達志水町今浜	散布地	不詳
30069	合浜Ｂ遺跡	宝達志水町今浜	散布地	不詳
30070	末森城跡	宝達志水町宿･麦生･南吉田	城跡	中世
30071	麦生Ａ遺跡	宝達志水町麦生	散布地	不詳
30072	宿東山１号墳	宝達志水町宿	古墳	古墳
	宿東山２号墳	宝達志水町宿	古墳	古墳
	宿東山３号墳	宝達志水町宿	古墳	古墳
	宿東山４号墳	宝達志水町宿	古墳	古墳
	宿東山５号墳	宝達志水町宿	古墳	古墳
	宿東山６号墳	宝達志水町宿	古墳	古墳
	宿東山７号墳	宝達志水町宿	古墳	古墳
	宿東山８号墳	宝達志水町宿	古墳	古墳
	宿東山９号墳	宝達志水町宿	古墳	古墳
	宿東山10号墳	宝達志水町宿	古墳	古墳
	宿東山11号墳	宝達志水町宿	古墳	古墳
	宿東山12号墳	宝達志水町宿	古墳	古墳
30073	宿東山遺跡	宝達志水町宿	集落跡	旧石器～奈良
30074	宿トリゲヤマ遺跡	宝達志水町宿	散布地	弥生～中世

第１表　遺跡地名表

第３章　冬　野　遺　跡

第１節　概　　要

冬野遺跡は台地上の調査区（Ａ、Ｂ、Ｃ区）と台地下の低地部の調査区（Ｄ区）に分かれる。Ａ～Ｂ区は台地上にコの字に配置され、台地南側縁に位置し張り出しに平行する部分をＡ区、台地を横断する部分をＢ区、台地北側縁に位置し張り出しに平行する部分をＣ区とした。Ｄ区はＣ区北側の低地部に位置し、調査区東端は押水バイパス法面裾となる。バイパスに近い箇所は丘陵緩斜面であるがバイパスから遠い箇所は前田川の氾濫原と思われる低地部と連続している。

台地上では縄文時代の落し穴、弥生～古墳時代の竪穴住居跡、古代の溝等を確認しているが、Ｂ・Ｃ区の北端を除いては削平を受けており耕作土直下がベース面となる。台地下では丘陵斜面部で小穴が確認されたが、低地部は削平された丘陵裾部と氾濫原となり遺構は確認されていない。現況では台地と低地部は比高さがあるが、本来は東に向かって傾斜している台地が、そのまま低地部へと連続していたと考えられる。

第２節　遺 構 と 遺 物

１．Ａ　　区

SD01（第５図）

Ａ区中央付近に位置する。調査区を斜めに横切り、ゆるい弧状を呈している。幅約120㎝、深さ約40㎝で、上面を削平されている。覆土は灰色系の土壌が堆積している。須恵器、土師器の小片が出土したほか、第７図18の台石が溝底からやや浮いた状態で出土している。また、上面の耕作土から、第７図10～16の須恵器が出土している。時期は古代と思われる。この他、幅20㎝ほどの溝が何条か確認されているが、すべて新しい畑の区画溝である。

SK01（第４図）

Ａ区東側に位置する。長径約80㎝、短径約50㎝のやや角ばった楕円形を呈する。深さは約60㎝で、坑底はほぼ平ら、中央に径約10㎝、深さ約40㎝の小穴が穿たれている。覆土は坑底付近に黄褐色土系の土壌が薄く堆積し、その上部には茶褐色系の土壌が堆積している。小穴の覆土は土坑の中位付近から堆積している。縄文時代の落し穴と考えられる。

SK02（第６図）

Ａ区西側に位置する。径約80㎝の円形を呈し、深さは約30㎝、坑底は平らである。上面が削平されていると思われ、本来の深さではないと考えられる。また、部分的に後世の撹乱を受けている。覆土は上部にベースの土壌に類似した土壌が堆積している。後述するＢ区 SK08に類似する。時期は不明である。

SK03（第６図）

Ａ区西側に位置する。半分程度が調査区外に延びる。幅約60㎝で長方形を呈するものと思われる。深さは約60㎝で坑底は平らである。これも上面が削平されていると考えられる。覆土は上部に茶褐色土系の土壌が堆積するが、中位以下はベースの土壌に類似した土壌が堆積している。SK01に類似し縄文時代の落し穴と考えられる。

SK04（第６図）

Ａ区西側 SX01と重なって位置する。長径約140㎝、短径約60㎝の長楕円形を呈する。深さは90㎝で坑底は平らである。覆度は上下に茶褐色系の土壌が堆積しているが、中位に堆積する土壌は灰色系の土壌となり、この層の下端から礫が出土している。SK01、03と同様縄文時代の落し穴と考えているが、前２者とは若干趣が異なる。

SK09（第６図）

Ａ区中央で確認された。調査区外に延びる。畑の区画溝等と切りあっているため規模、形状は良くわからないが、長径80㎝、幅70㎝ほどの楕円形と想定している。深さは非常に深く検出面から200㎝以上である。完掘はしていない。

SX01～03（第５、６図）

不整形な落ち込みを SX とした。SX01は調査区西側端に位置する。検出時に焼土、炭化物の広がりとして確認した。竪穴住居跡と想定されたが、掘り下げにかかると浅く、坑底も一定しない。上面が削平され、後世の耕作が坑底にまでおよんでおり判然としない。後世の耕作にかかわる可能性を否定できない。しかし、南西隅で底に焼土面を伴う P01が確認され、第７図３～６の古墳時代と思われる土器が出土している。また、他にも２箇所で焼土面が確認されている。形態は１辺４ｍほどの方形となる可能性があるものの、壁の立ち上がり等は明瞭ではなく竪穴住居跡とするには疑問が残る。

SX02は SK01の東側に隣接する。深さ30～60㎝としっかりしており、いくつかの土坑の切りあいとも思われるが、覆土にしまりがなく明瞭な遺構とは判断できなかった。SX03はＡ区中央で確認され、当初は土坑と考えていたが、覆土にしまりがなく明瞭な遺構とは判断できなかった。

この他、多数の小穴等が確認されたものの多くは木の根、耕作にかかわる撹乱である。遺物はほとんどが耕作土中から出土したもので、土器は細片化している。17は石錘、19は鉄鏃、20は鑿と思われる。

２．Ｂ　　区

SI01（第11図）

調査区北端で検出した。北側半分以上は開田で失われ、残りの３分の２は調査区外に広がる。緩斜面に位置し、開田の際、盛土された部分に当たるため上部の残りは良かった。

平面形は円、または多角形を呈すると思われ、大形住居と考えられる。深さは最深部で約80㎝である。覆土は茶褐色土系の土壌であるが、上部には黄褐色土ブロックの混入する層が認められ、住居中央ではその直下の層がそのまま床面を覆っている。壁際では焼土ブロックや炭化部材を含む層が堆積し、炭化部材は壁から内側に向かって倒れたような状態で出土している。太い部材はなくうまく取り上げられなかった。その下位は黄灰色粘質土で床面が構築されているが、中央付近ははがれてしまった部分も認められる。この床面では壁溝を１条確認している。壁溝の上面からは第12図32の台付鉢、35の台石が出土した。

柱穴は北側端付近で２基確認した。１基は壁溝から160㎝離れ、径約25㎝、深さ約45㎝、もう１基は壁から190㎝離れ、径約50㎝のやや角ばった円形を呈し、深さは約50㎝で北側にテラスが１段確認できる。

床面を除去すると下位の床面が確認でき、サブトレンチではさらにその下が掘り込まれている。下位の床面では壁溝を３条確認した。うち１条は、調査区東壁に添うような形で確認され、方形の形態をとる時期があったことをうかがわせる。他の２条は上位の壁溝から分岐するような形で延び、内側

の１条は途中で浅くなり検出できなくなる。柱穴は上位の柱穴の南側で、３基が重なったような状態で確認できた。深さは上位の柱穴よりわずかに浅い。

これらのことからこの竪穴住居は検出された南西壁際付近を基点として３回以上の建て替えが行われ、放棄された時点以降に火を受けたことが想定できる。時期は壁溝上面から出土した土器から弥生時代後期後半と考えられる。覆土下層からは第12図33、34の研磨面を持つ軽石が出土している。また、上面、上部からは第12図36、37のような７世紀代の須恵器も出土している。

SI02（第10図）

調査区北側、SI10から10ｍほど南側で検出された。ちょうど水田の段差となる部分で検出され、壁溝と床面の一部のみ確認している。耕作にかかわる溝等と重なっており判然としない。壁溝は幅20㎝で壁の立ち上がりは10㎝弱残っている。床面は壁溝から北に１ｍほど残っているが、後世の溝等により撹乱されている。Pa、Pb が深さ40～50㎝あり柱穴の可能性を持つが、壁溝の方向とはずれておりこの竪穴住居のものかどうかはわからない。床面と思われる部分から第12図42の土器が出土している。

SI03（第８図）

調査区南側で焼土面が確認され、その南に位置する Pc、Pd がしっかりとした柱穴であることから竪穴住居跡と考えた。壁の立ち上がりは存在しない。焼土面は長径100㎝、短径70㎝ほどの楕円形を呈する。Pc、Pd は径約25㎝、深さ約65㎝で2.3ｍほど離れている。焼土面を竈とすれば１辺５ｍ前後の竪穴住居跡が想定できる。焼土の西に隣接して SK05とした径約90㎝、深さ20㎝弱の土坑があり、第13図43～50が出土している。これがこの竪穴住居跡にかかわるものであるならば６世紀段階の竪穴住居跡といえるが、県内では竈を持つ竪穴住居が６世紀にまでさかのぼる確実な事例が少なく遺構の状態も悪いことから、現状では判断を保留しておく。この他 Pe、Pf が建物の柱穴の可能性を持つ。

SK06（第10図）

調査区南側、SI02から６ｍほど南側で確認された。半分は調査区外に広がる。径約180㎝の円形を呈し、深さ約120㎝、壁際に幅20㎝ほどの壁溝がめぐらされている。覆土は壁溝から壁に沿って立ち上がる灰褐色土壌があり、何らかの有機物による構築物の存在をうかがわせている。坑底に多量の礫を含む層があり、壁際には暗灰茶色の土壌が堆積している。中位に暗灰褐色の土壌をはさみ上下に灰褐色の土壌が堆積している。覆土から第13図51～53の土器が出土し、弥生時代後期後半ごろのものと思われる。

SK07・08・10（第８図）

SK07、08は調査区南端で確認した。SK07は長径約100㎝、短径約70㎝の楕円形を呈し、深さは約120㎝、坑底からゆるく開いて立ち上がる形状を呈する。SK08は一部が調査区外となるが、長径120㎝、短径50㎝ほどの楕円形を呈すると想定される。深さは約110㎝で、07と同様な形態をとる。SK10は調査区中央付近で確認し、径約70㎝の略円形を呈する。深さは約80㎝で、07、08と同様な形態をとる。覆土はいずれも上位と最下位に茶系の土壌が堆積するほかは黄灰色系の土壌となり、ベースの土壌との判別が難しい。遺物が出土せず時期は不明である。

これら以外にも溝、土坑、小穴が確認されているものの遺構と判断できなかった。

３．Ｃ　　区（第14～15、18図）

Ｃ区はＢ区北端と同様、台地北側の緩斜面にあたり、縁は盛土でおおわれており削平を免れた部分が多かった。にもかかわらず検出された遺構は小穴と、不整形な土坑状の落ち込みのみである。遺物の出土量も少なく、遺跡の縁辺に当たるのかもしれない。第18図56、57は弥生時代後期後半と思われ、

57はP21とした土坑状の落ち込みから出土した。58～64は９世紀初め頃のものと考えられる。67は横瓶で浅い小穴P15上面から出土し、59はその口縁部と思われ隣接する浅い小穴P14から出土している。62～64は同一固体で製塩土器である。65は鉄器で先端部に刃部を持つ。

４．Ｄ区・試掘調査区（第16～18図）

Ｄ区は水田２枚にわたっている。東側は丘陵の緩斜面でベース面は丘陵堆積物となるが、東端はすでに削平されていた。西に行くにつれ盛土に覆われ遺存状態は良くなるのだが、検出された遺構は、小穴と不整形な落ち込みのみである。西側も東端が開田で削平されており、中ほどからは鞍部へと移行する。遺構は確認されなかった。遺物は第18図66の須恵器坏、68の珠洲焼擂鉢のほか土師器小片がわずかに出土したのみである。

試掘調査区はＤ区の押水バイパスを挟んだで東側に隣接する水田である。４箇所の試掘坑を設け、遺構、遺物の有無を確認した。NO.１～３では遺構が確認されたがNO.４では確認されなかった。遺物は土器小片のほか、第18図69、70の石錘が出土した。

５．その他の遺物（第19図）

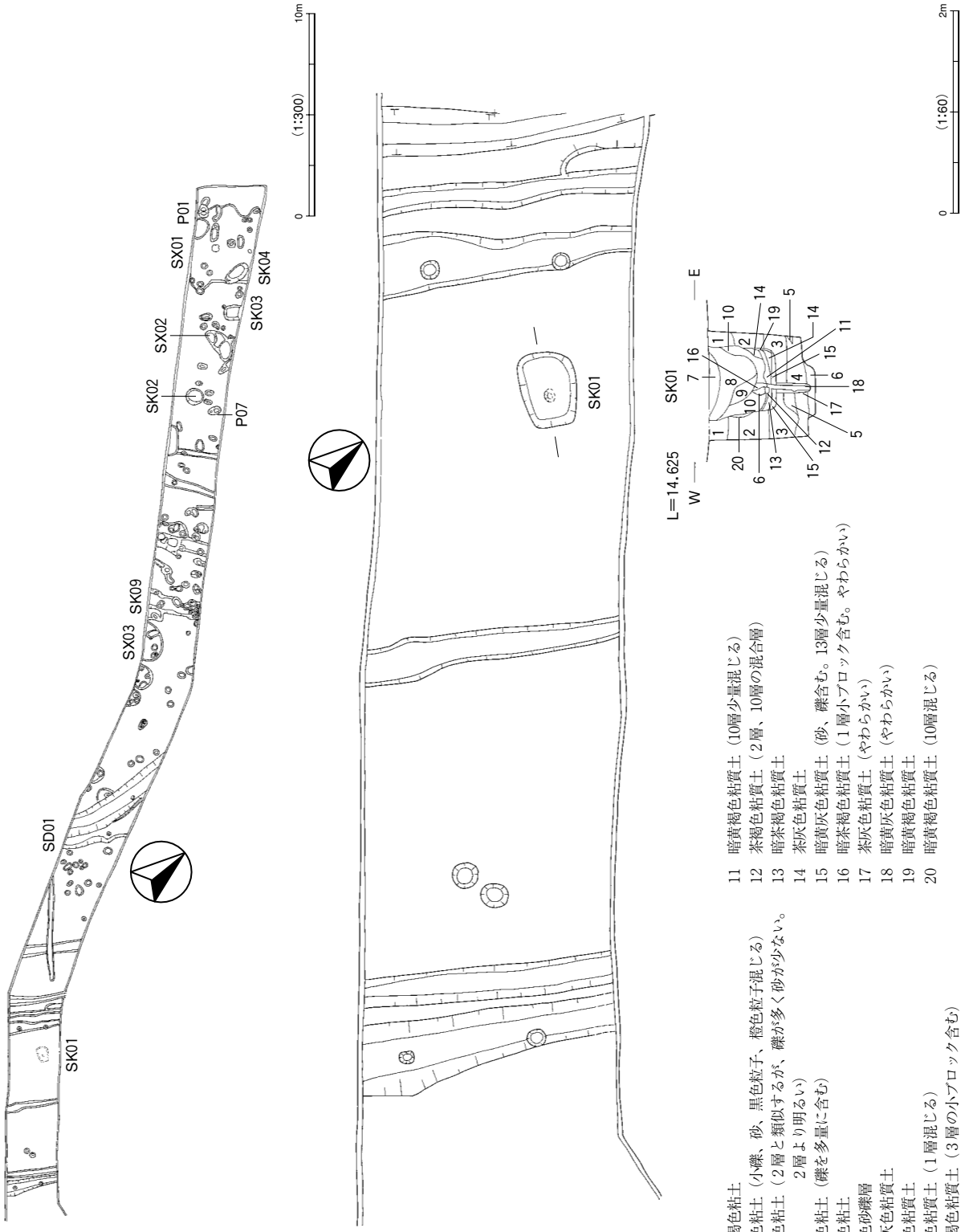
第19図71～73、76～80、82、83は冬野遺跡の位置する丘陵南裾部から採集されたものである。出土地点は丘陵の南裾でＢ区の延長よりわずかに南側である。この部分はゆるく丘陵がえぐれ裾部にはわずかな平坦面がある。丘陵から廃棄されたとも考えられるが、このわずかな平坦面が水場等の施設であった可能性も考えられる。74、81は丘陵先端部の裾で採集されたものである。冬野遺跡の立地する丘陵の西から南にかけての低地部は腐蝕物の堆積が厚いらしく、ほ場整備工事の重機が沈み込んでしまい難儀しているという話を聞いている。75は調査区の西側、丘陵上で採集されたものである。71～73は弥生時代後期後半、74～82は９世紀代のものと思われる。

第３節　小　　結

今回の冬野遺跡の調査は、昭和61年の押水バイパス調査区より西側の広がりを捉えることとなった。遺跡自体は削平が著しく、遺存状態はあまり良好とはいえない。

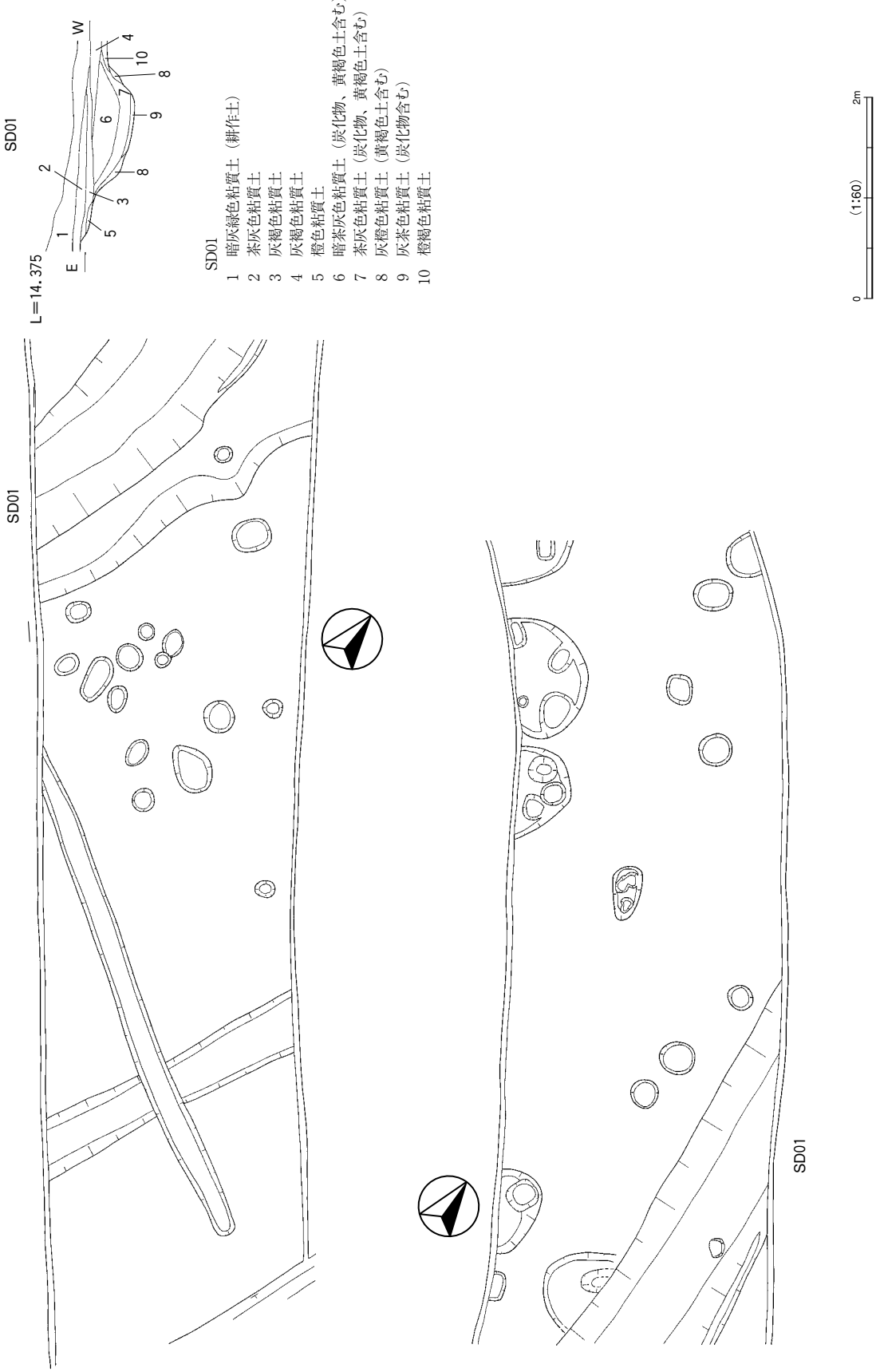
縄文時代では落し穴が確認され、前回調査地点と同様狩猟の場であったといえる。弥生時代では大型土坑が確認され、その分布範囲が広がった。竪穴住居跡は大形・円形のものが確認され、複数棟で構成される集落跡であった可能性を示唆している。

古墳時代では後期の竪穴住居跡と考えられる遺構が検出され、同時期の建物バリーエーションが増えた。古代では溝状の遺構が確認されたが、これが前回調査で確認された建物群とどうかかわるのか興味深いところである。

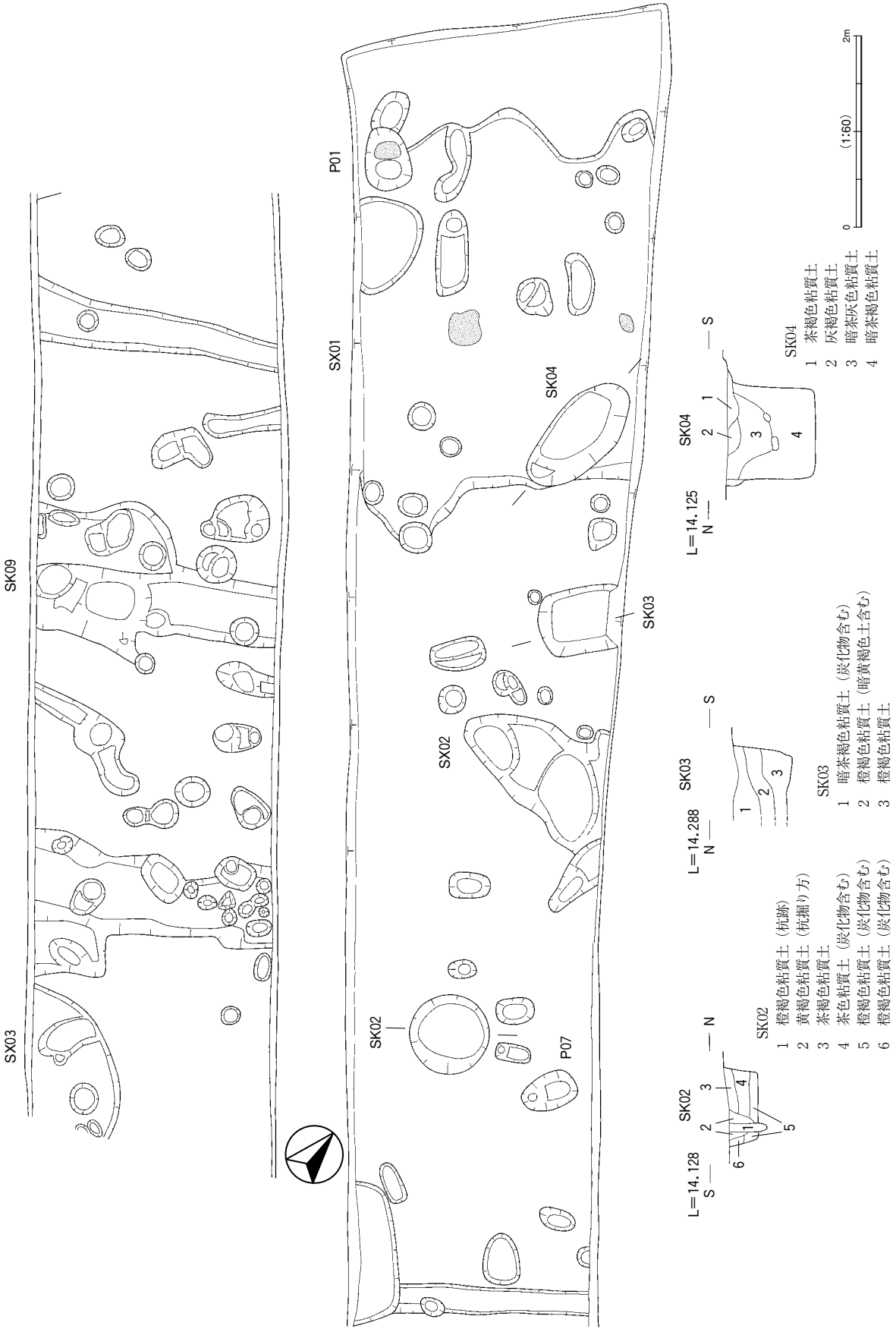


SK01
1　暗黄褐色粘土
2　黄褐色粘土（小礫、砂、黒色粒子、橙色粒子混じる）
3　黄褐色粘土（２層と類似するが、礫が多く砂が少ない。２層より明るい）
4　黄褐色粘土（礫を多量に含む）
5　灰白色粘土
6　淡灰色砂礫層
7　暗茶灰色粘質土
8　茶褐色粘質土
9　茶褐色粘質土（１層混じる）
10　暗茶褐色粘質土（３層の小ブロック含む）
11　暗黄褐色粘質土（10層少量混じる）
12　茶褐色粘質土（２層、10層の混合層）
13　暗茶褐色粘質土
14　茶灰色粘質土
15　暗黄灰色粘質土（砂、礫含む。13層少量混じる）
16　暗茶褐色粘質土（１層小ブロック含む。やわらかい）
17　茶灰色粘質土（やわらかい）
18　暗黄灰色粘質土（やわらかい）
19　暗黄褐色粘質土
20　暗黄褐色粘質土（10層混じる）

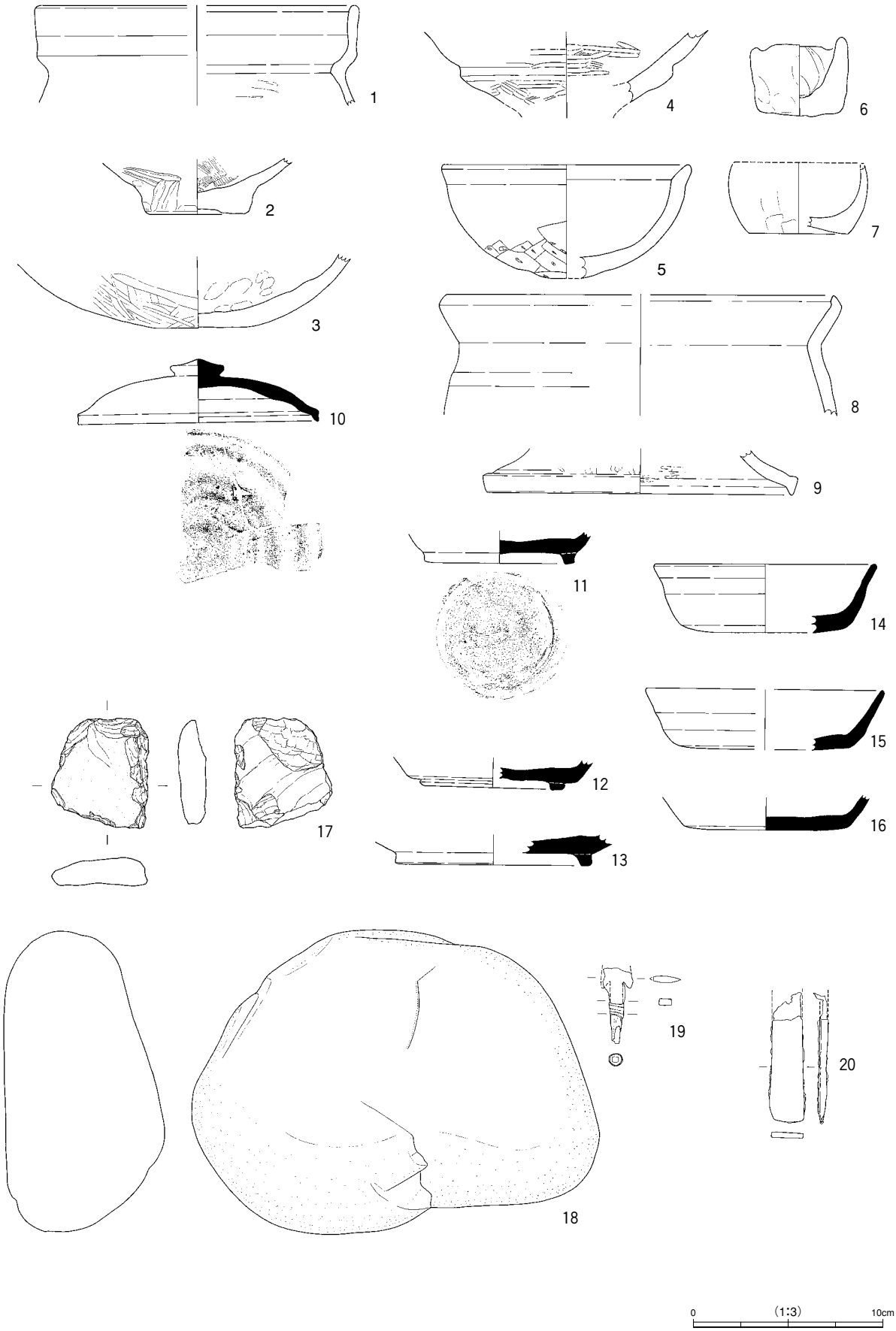
第４図　Ａ区遺構実測図(1)（Ｓ＝1/300・Ｓ＝1/60）



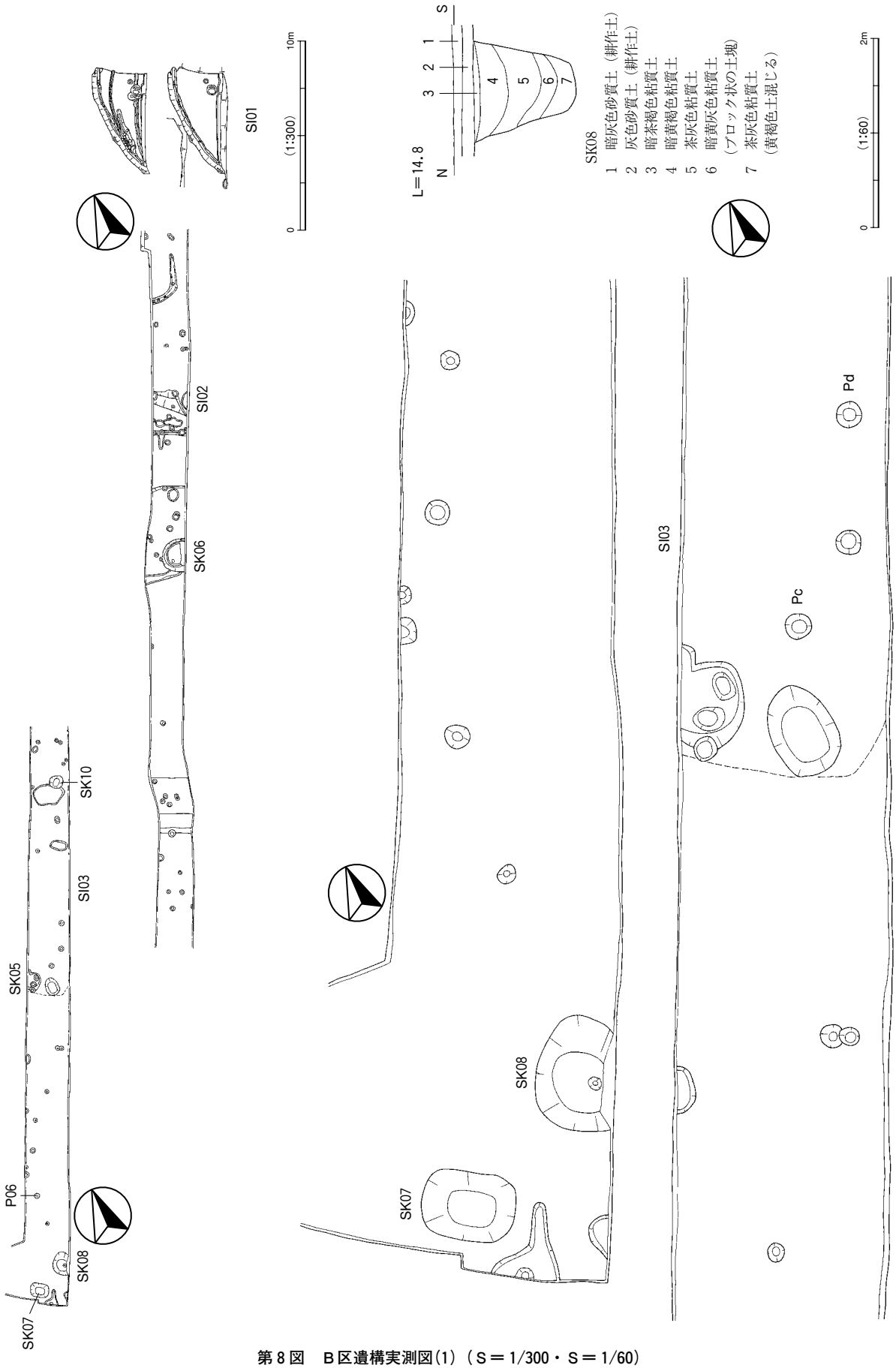
第５図　Ａ区遺構実測図(2)（Ｓ＝1/60）



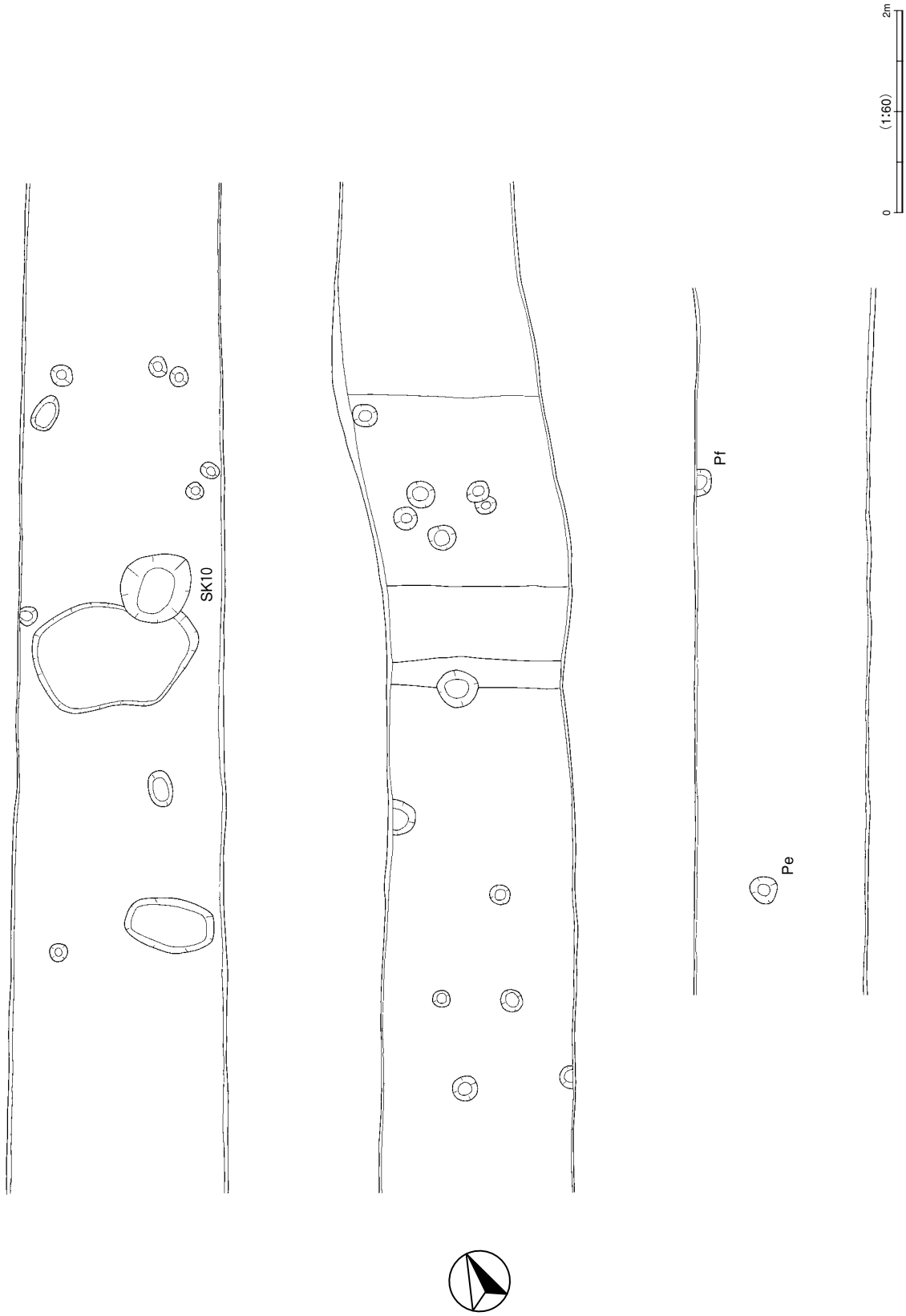
第６図　Ａ区遺構実測図(3)（Ｓ＝1/60）



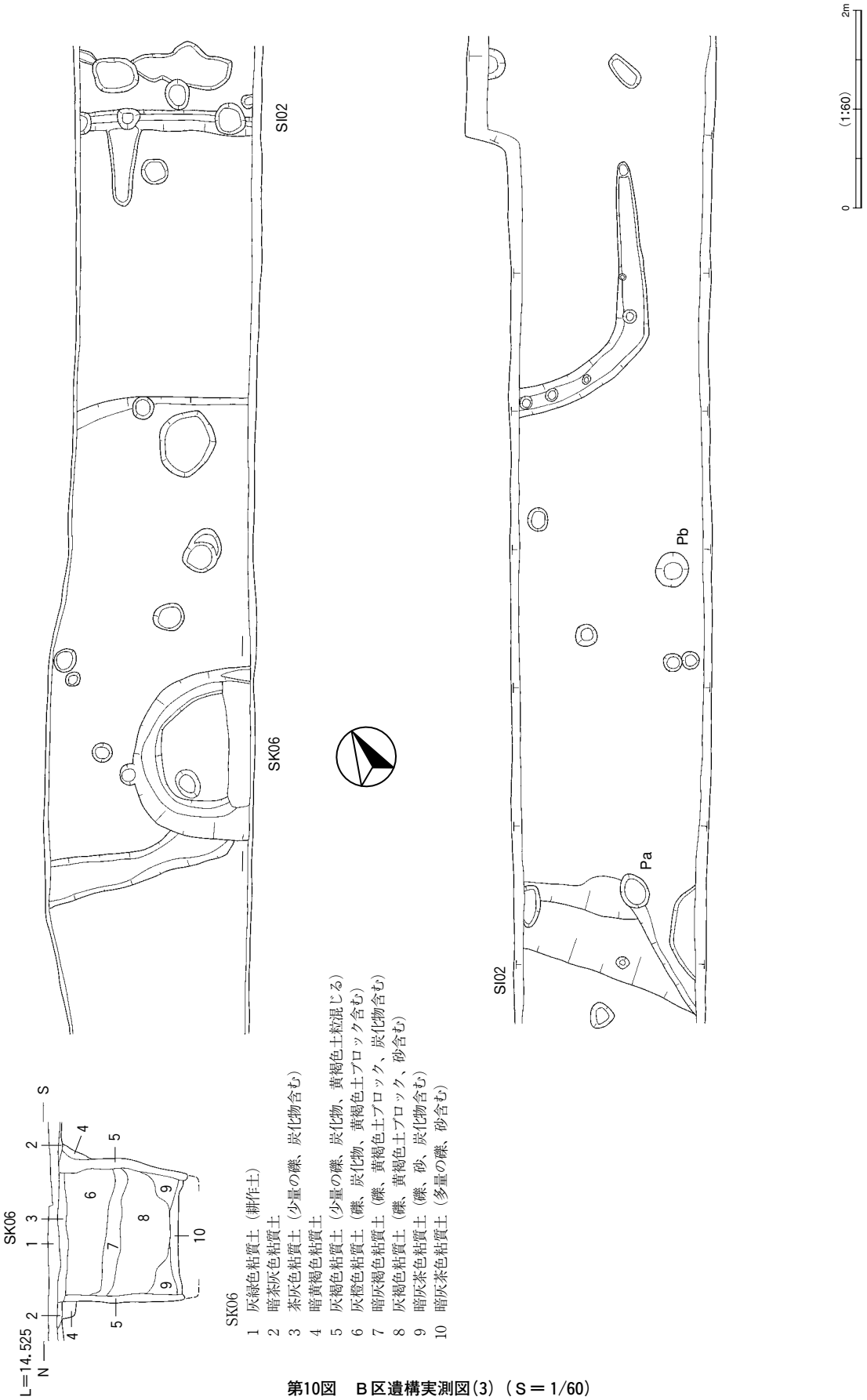
第７図　Ａ区遺物実測図（Ｓ＝1/3）



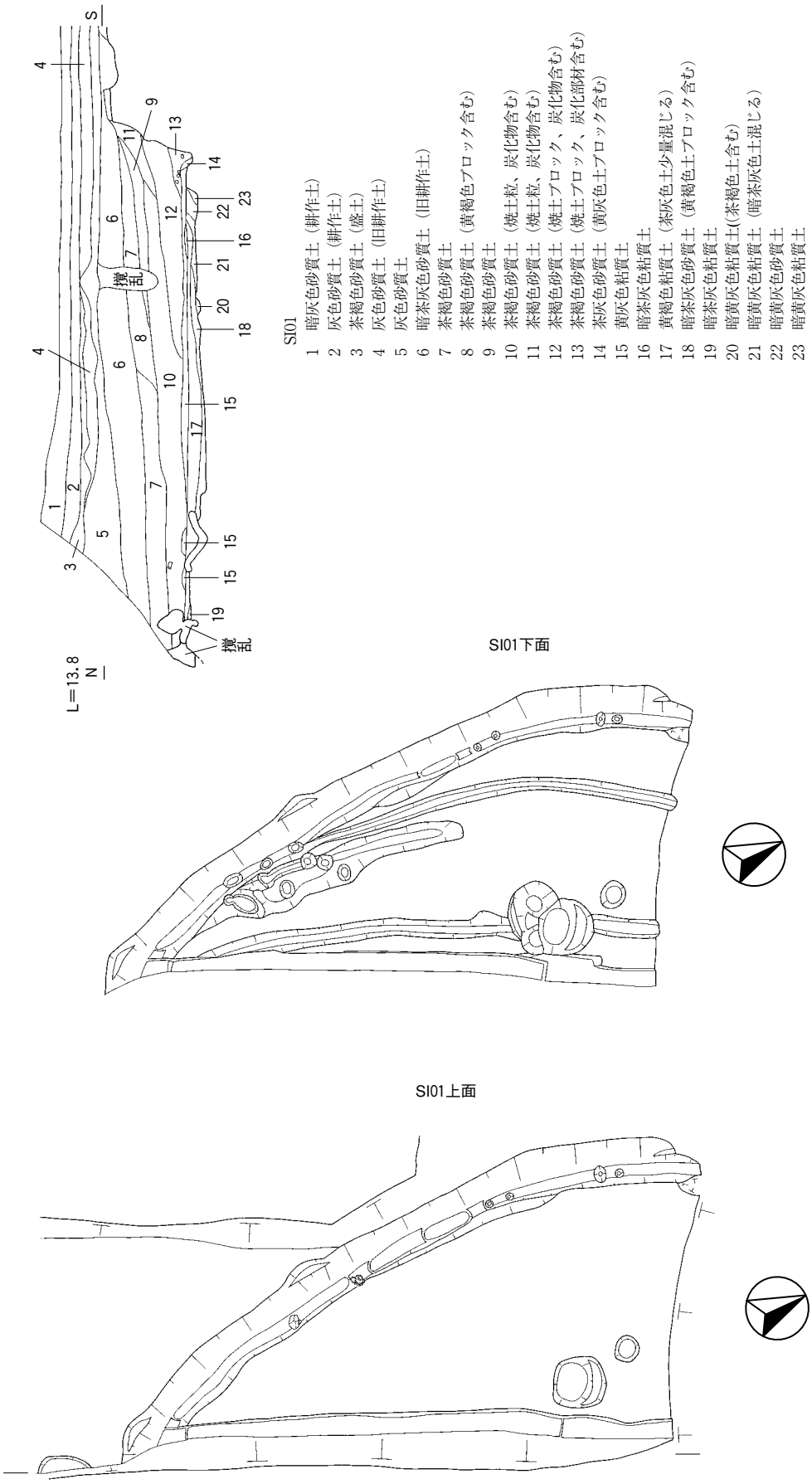
第８図　Ｂ区遺構実測図(1)（Ｓ＝1/300・Ｓ＝1/60）



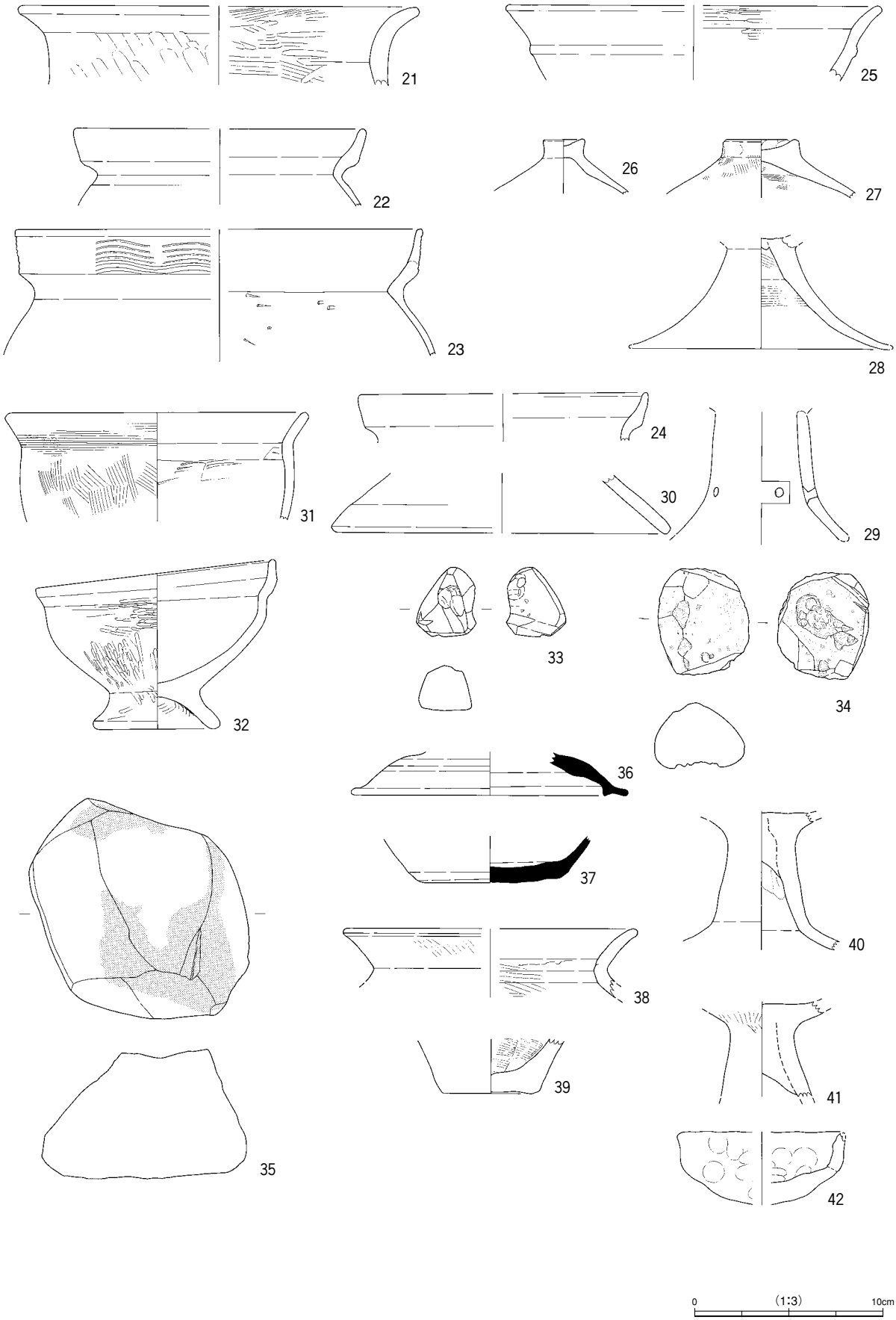
第９図　Ｂ区遺構実測図(2)（Ｓ＝1/60）



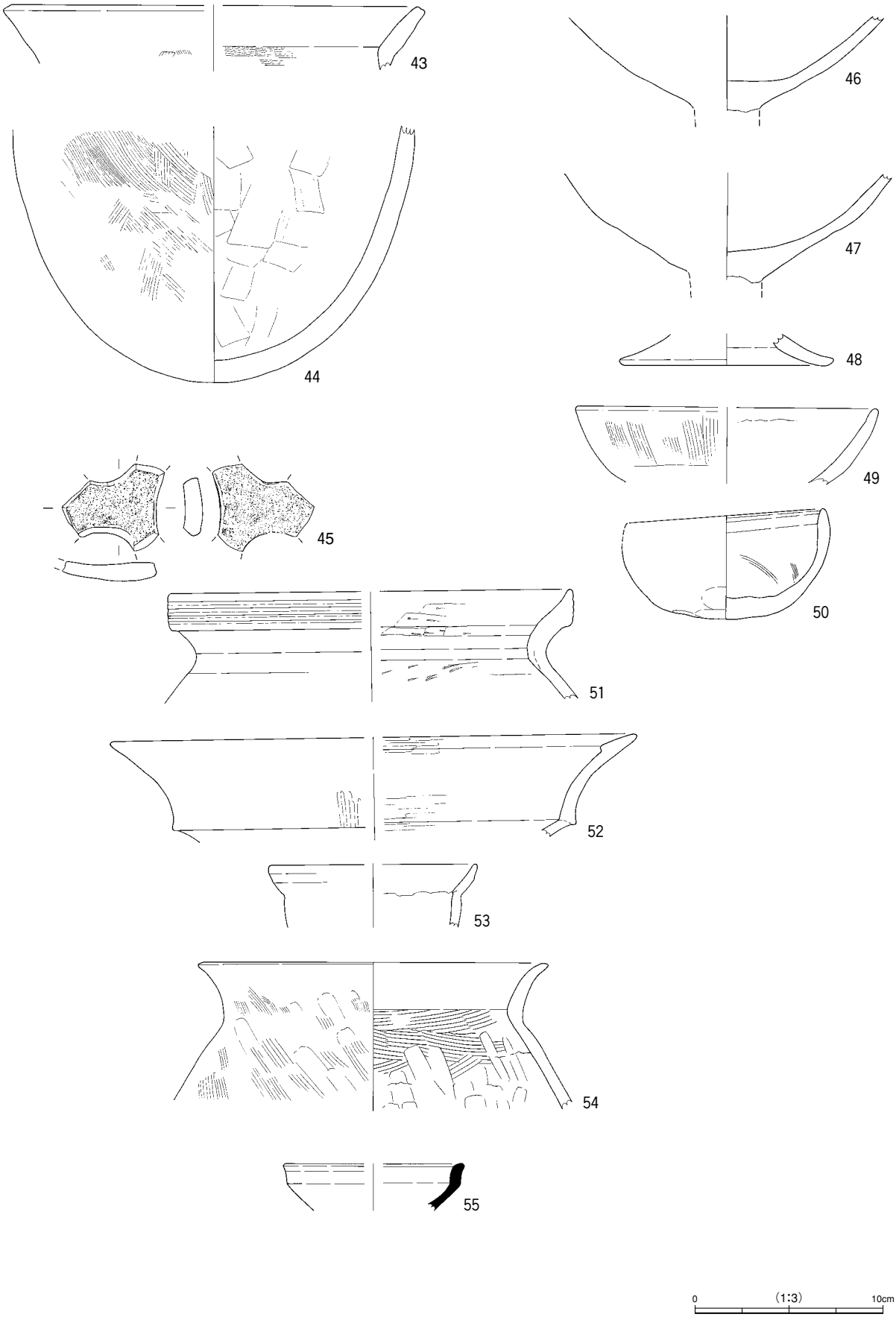
第10図　Ｂ区遺構実測図(3)（Ｓ＝1/60）



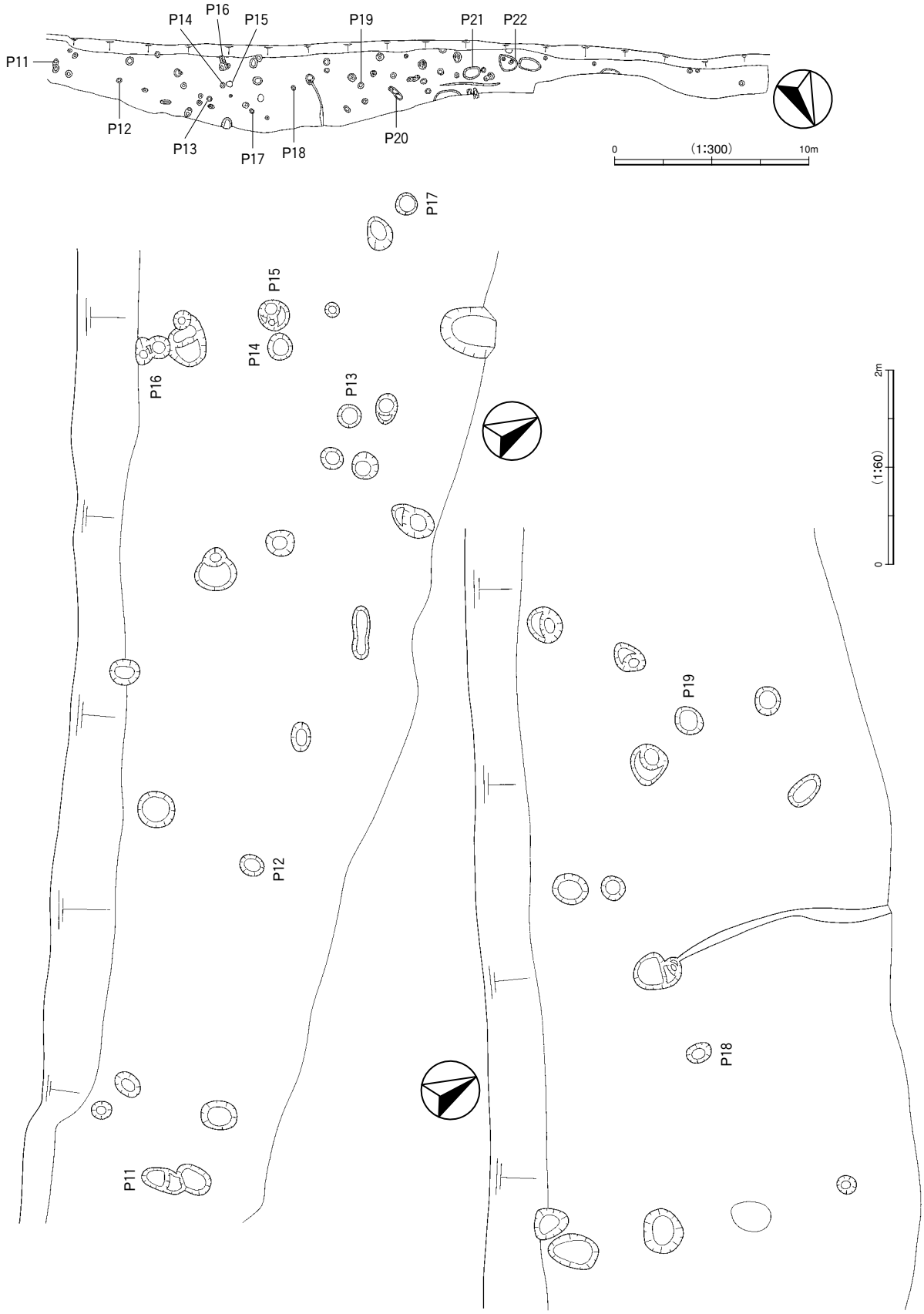
第11図　Ｂ区遺構実測図(4)（Ｓ＝1/60）



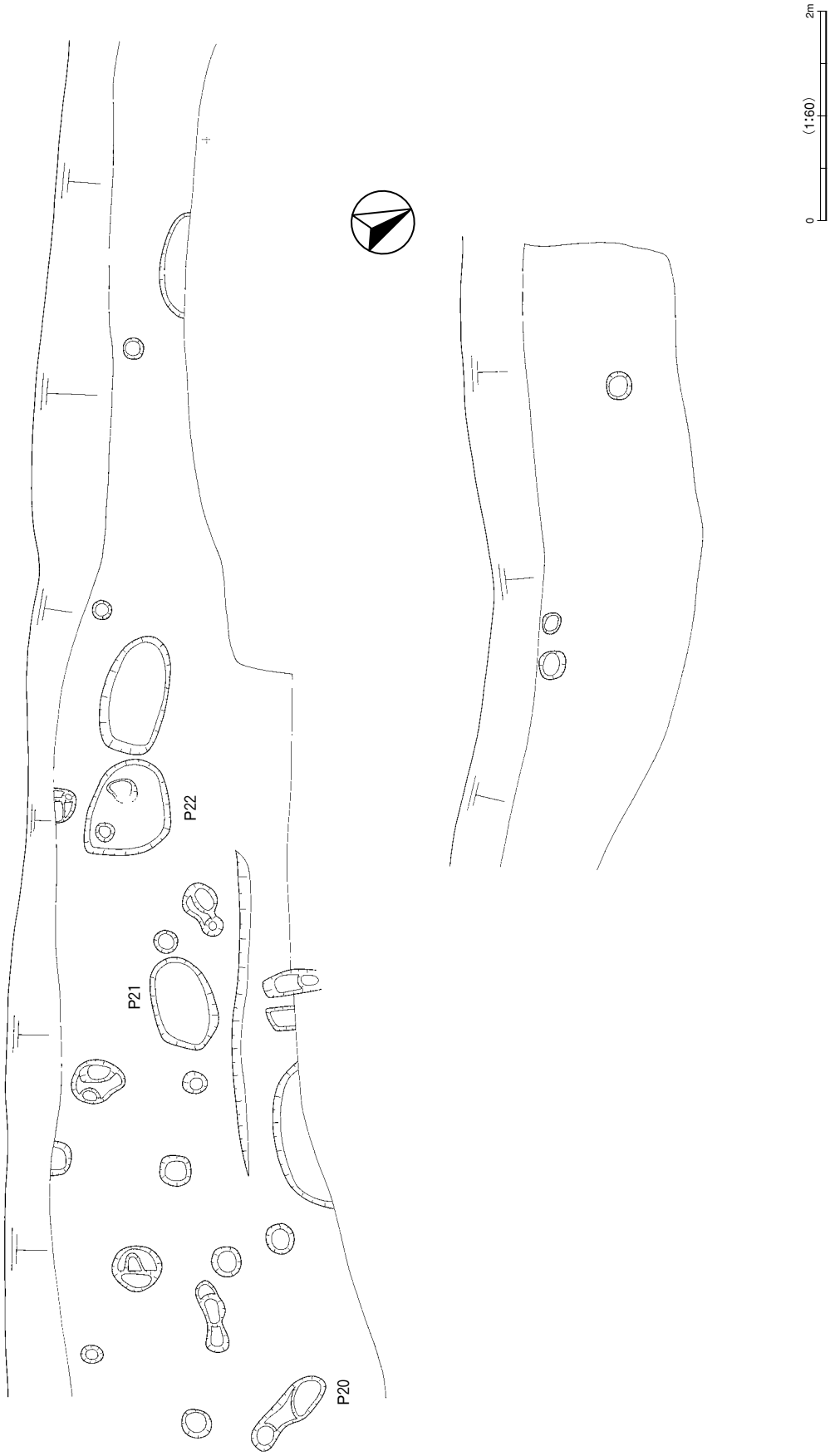
第12図　Ｂ区遺物実測図(1)（Ｓ＝1/3）



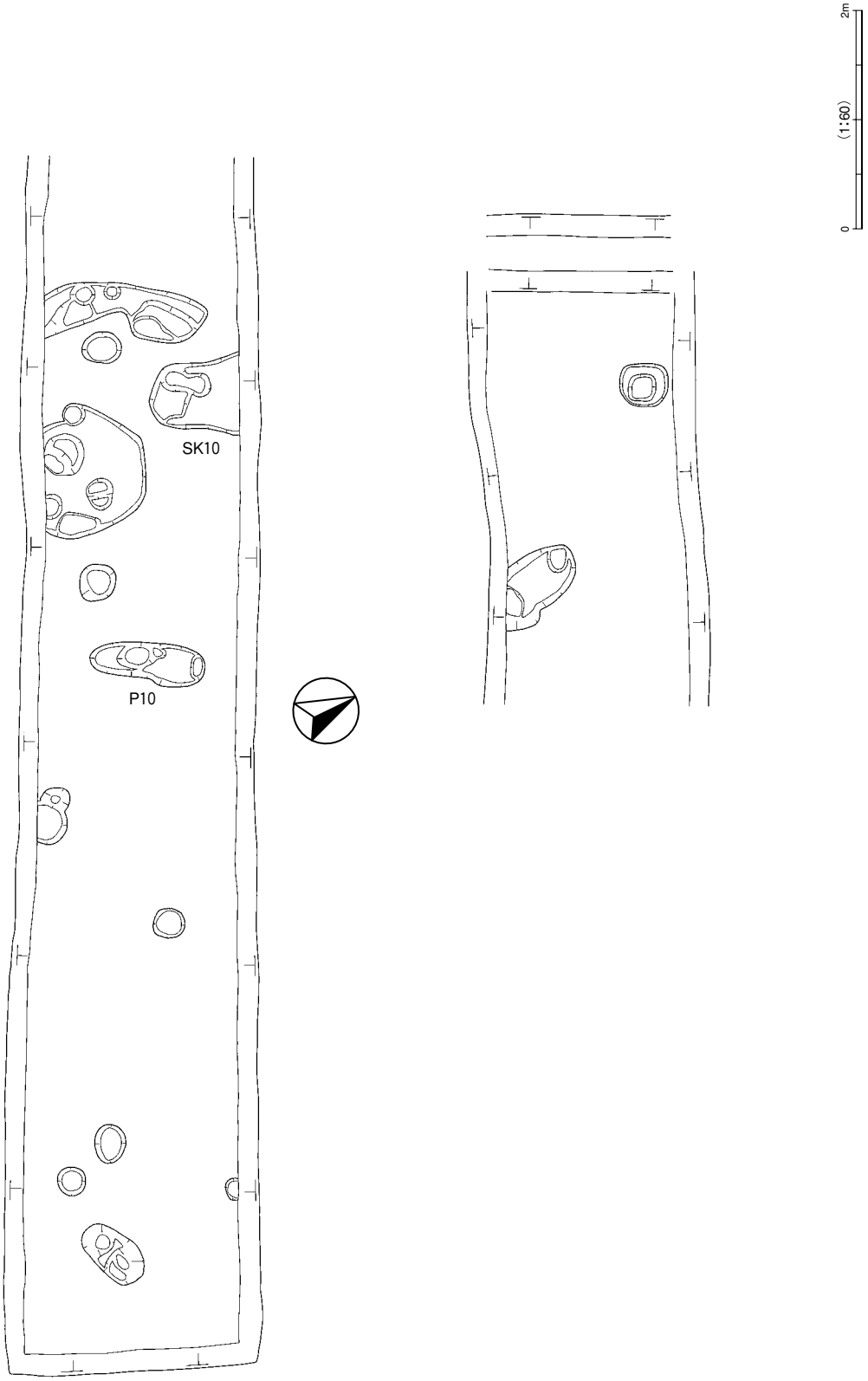
第13図　Ｂ区遺物実測図(2)（Ｓ＝1/3）



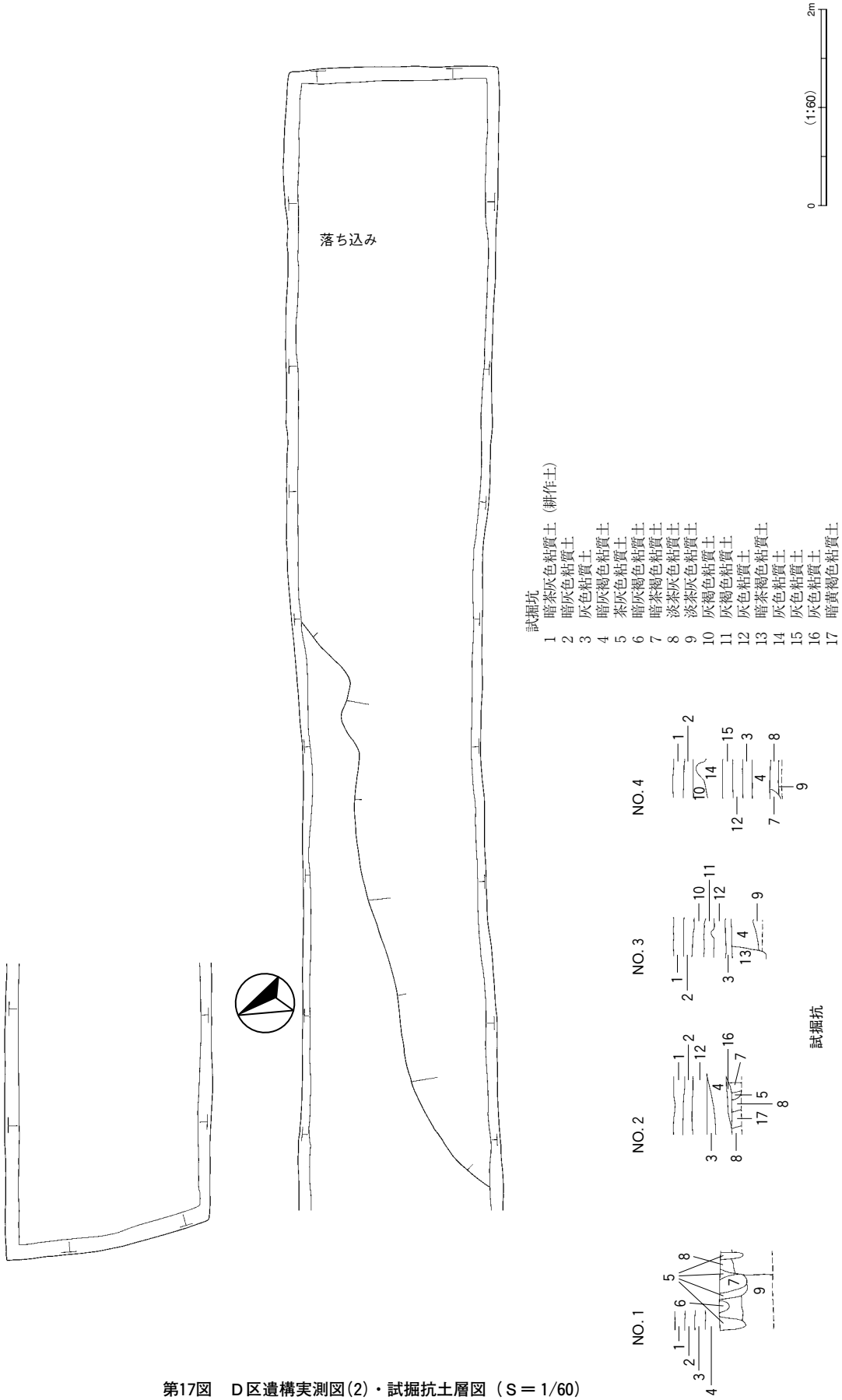
第14図　Ｃ区遺構実測図(1)（Ｓ＝1/300・Ｓ＝1/60）



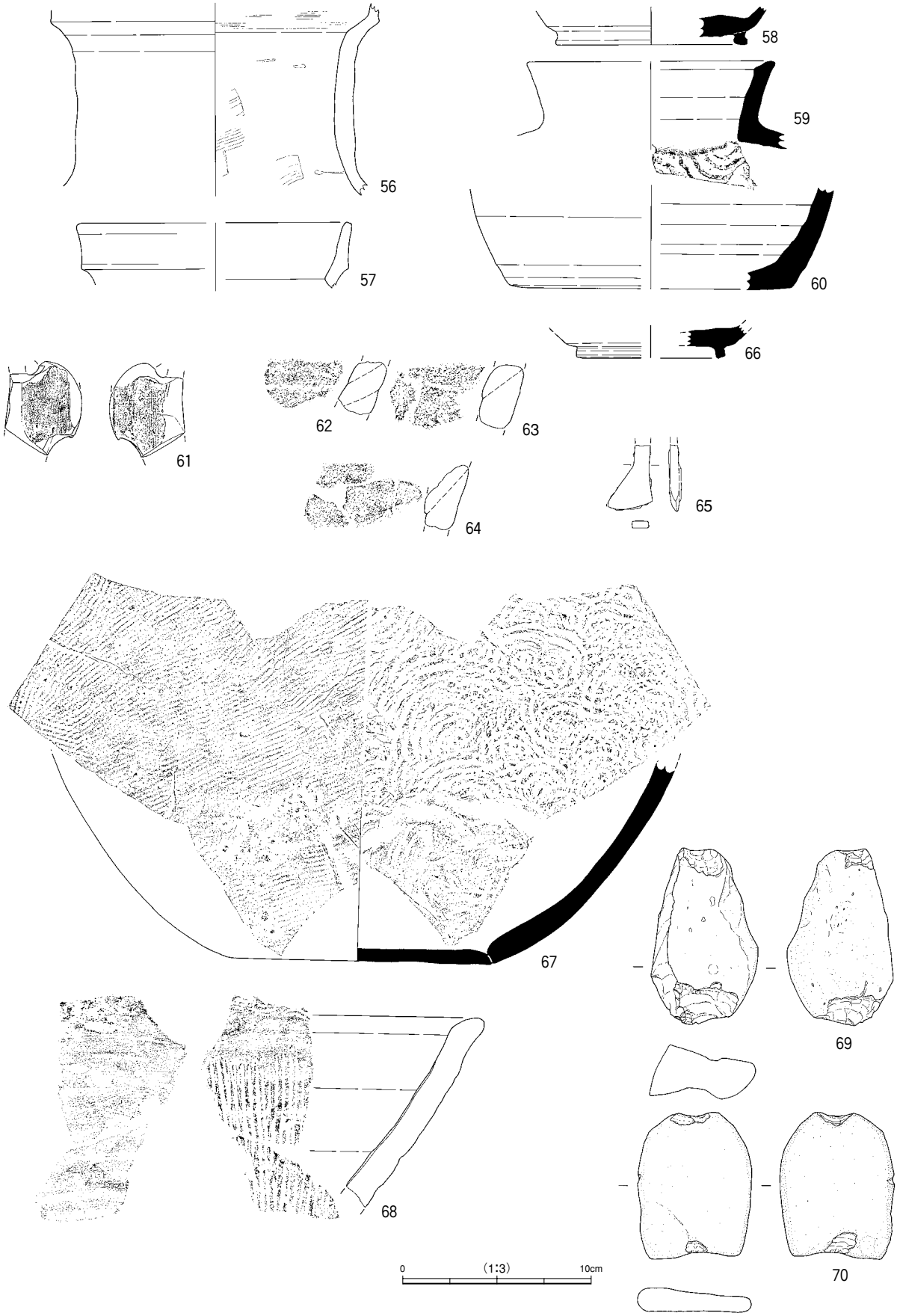
第15図　Ｃ区遺構実測図(2)（Ｓ＝1/60）



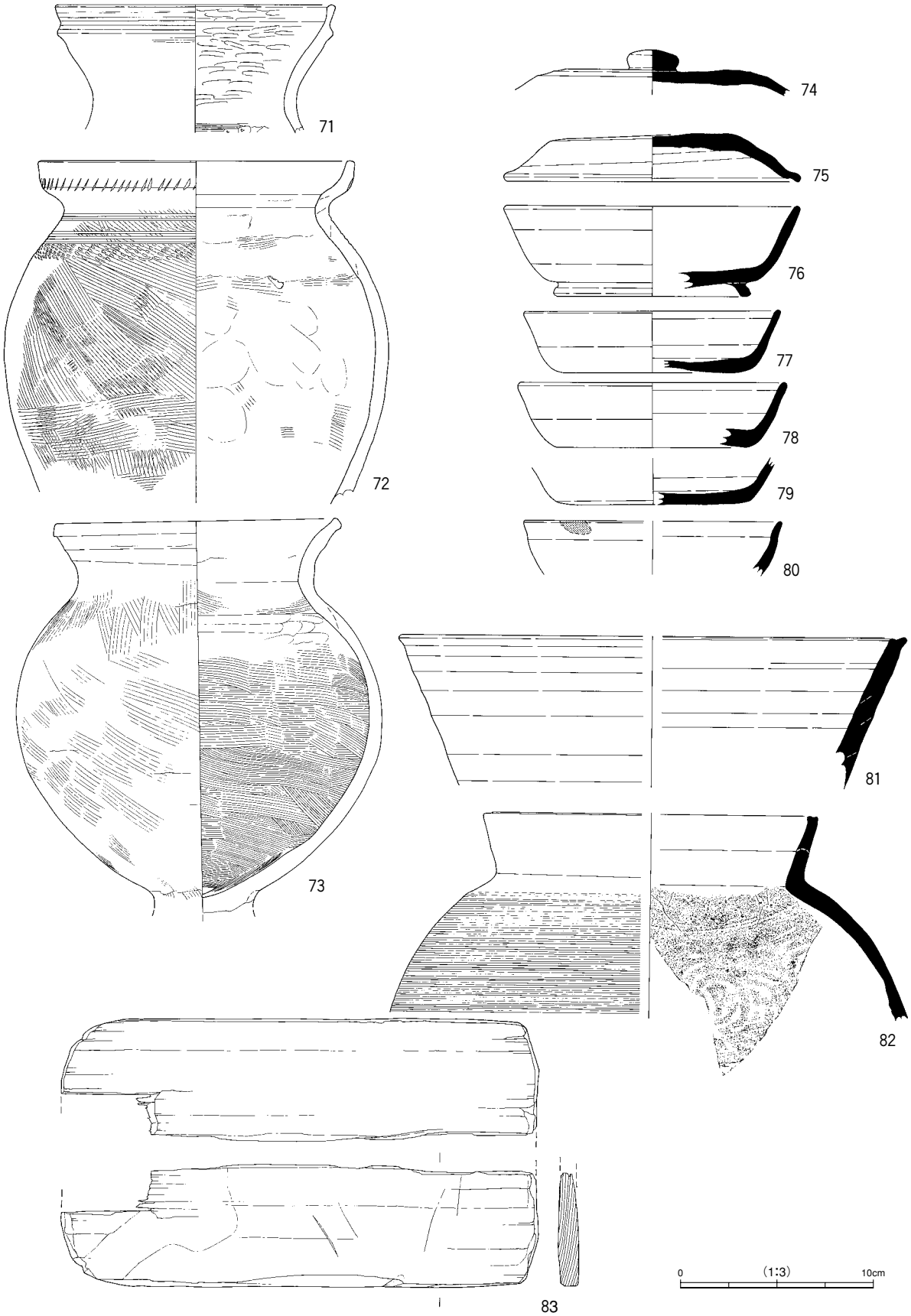
第16図　Ｄ区遺構実測図(1)（Ｓ＝1/60）



第17図　Ｄ区遺構実測図(2)・試掘抗土層図（Ｓ＝1/60）



第18図　Ｃ区・Ｄ区・試掘抗遺物実測図（Ｓ＝1/3）



第19図　冬野遺跡採集遺物実測図（Ｓ＝1/3）

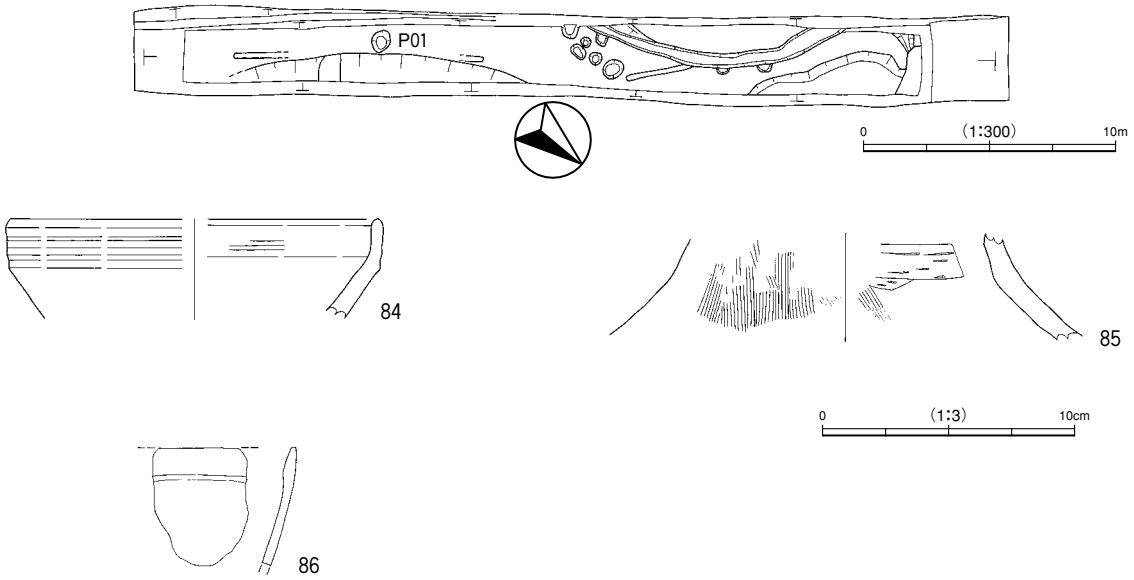
第４章　免田一本松遺跡

今回の調査地点は、押水バイパス調査区の西側に120mほど離れた地点で丘陵裾部に当たる。丘陵部は北に向う緩斜面で畑が営まれ、丘陵下の低地部は水田である。調査区はその境目となる。

調査区西側では削り残された丘陵縁が確認され、溝、小穴等が見つかったもののすべて後世の耕作にかかわるものである。東側では盛土を除去すると、低地部への移行部分が現れP01とした土坑状の落ち込みが確認できた。P01は径約90㎝、深さ約50㎝で茶褐色系の土壌が堆積している。遺物は出土しなかったが、覆土から遺構と考えられ、低地部に構築された貯蔵穴と考えている。

遺物は盛土中から細片化した土器が出土したにとどまる（第20図84、85）。また、付近で第20図86の鉄鍋片が採集されている。

今回の調査地点で検出されたP01は前回調査では、明確ではなかった貯蔵穴が低地に分布する可能性を示唆する資料と思われる。



第20図　免田一本松遺跡・遺構・遺物実測図（Ｓ＝1/300・Ｓ＝1/3）

（cm）

挿図番号	実測番号	出土地点	器　種	口径	底径	器高	色調(内側)	色調(外側)	胎　　土	焼成	調整(内側)	調整(外側)
1	C－16	A　西側	甕　口縁	16.7		(5.35)	にぶい黄橙	にぶい橙	砂粒　微砂粒多く含む	良	不明、ケズリ	不明
2	C－30	A　中央	土師器　底部		5.5	(2.9)	にぶい橙	にぶい黄褐色	赤色粒、砂粒、微砂粒含む	良	ハケ	工具による圧痕有、ミガキ
3	C－25	A　PO１	土師器　底部		(4.7)	(3.8)	にぶい黄橙	にぶい橙	海綿骨片、赤色粒、礫多く含む砂粒微砂粒含む	良	ナデ、指おさえ	不定方向ナデ
4	D－28	A　PO１	高脚坏　杯部			(3.8)	にぶい赤褐	橙	海綿骨針少　赤色粒少	良	ハケ後ミガキ	ハケ後ミガキ
5	D－38	A　PO１	土師器　埦	13.2	9.4	(6.0)	にぶい黄橙	にぶい黄橙	２ミリ以上の礫多、石英含	良	ヨコナデ	ヨコナデ、ケズリ
6	D－27	A　PO１	手づくね	4.5	4.2	4.2	橙	橙	赤色粒少　海綿骨針少	良	手づくね　指ナデ	手づくね指頭圧痕
7	D－26	A　中央	手捏ね	(6.9)	5.2	(3.8)	橙	黒褐	１ミリ前後の砂粒、赤色粒含む	良	不明	ナデ
8	D－36	A　中央壁面	甕　口縁	(20.4)		(6.4)	橙	橙	0.5ミリ前後の砂粒、赤色粒含む	良	ヨコナデ	ヨコナデ
9	C－21	A　SX02	器台か高坏　脚部		15.9	(2.4)	にぶい褐色	にぶい褐色	粗砂：少　礫：わずか	良	ミガキ	ミガキ
10	D－7	A　中央	須恵器　蓋			3.35	灰白	灰白	粗砂、礫含む	良	ロクロナデ、ヨコナデ	ロクロナデ、ヨコナデ
11	D－9	A　中央	須恵器　有台坏		7.9	1.7	灰白	灰白	粗砂、礫少量含む	不良	ロクロナデ	ロクロナデ　底部：回転ヘラ削り
12	D－17	A　中央	須恵器　有台坏		7.4	1.6	灰	灰	粗砂、礫含む	良	ロクロナデ	ロクロナデ　底部：回転ヘラ削り
13	D－16	A　中央	須恵器　有台坏		10.4	1.6	灰白	灰白	粗砂少量含む	不良	ロクロナデ	ロクロナデ　底部：回転ヘラ削り
14	D－20	A　中央	須恵器　無台杯	11.6	8.8	3.6	灰白	灰白	粗砂、礫含む	不良	ロクロナデ	ロクロナデ　底部：磨耗の為不明
15	D－8	A　中央	須恵器　無台坏	(12.4)	(9.0)	3.2	灰	灰	粗砂、礫少量含む	良	ロクロナデ	ロクロナデ　底部：回転ヘラ削り
16	D－18	A　中央	須恵器　無台坏		8.6	1.9	灰白	灰白	粗砂、礫含む	不良	ロクロナデ	ロクロナデ　底部：回転ヘラ削り
21	D－39	B　SI01　上層	甕	(20.9)		(4.3)	にぶい橙	にぶい橙	礫：わずか　粗砂：わずか	良	ミガキ	工具によるナデ
22	C－19	B　SI01　上層	甕　口縁	(15.3)		(4.1)	橙	橙	粗砂：少　３ミリ程度の礫：有	良		
23	C－12	B　SI01　上層	甕	(21.5)		(6.8)	浅黄橙	橙	0.5～３ミリ大の砂礫含む	良	ケズリ、ヨコナデ	ナデ、ヨコナデ
24	C－14	B　SI01　下層	甕	(15.2)		(2.5)	橙	橙	粗砂：わずか　礫：少	良	磨耗	磨耗
25	C－24	B　SI01　上層	高坏？	(19.6)		(4.0)	橙	橙	粗砂わずか	良	ミガキ	ミガキ
26	C－11	B　SI01　上層	蓋	つまみ径2.0		(2.9)	にぶい黄橙	にぶい黄橙	粗砂：少　細砂：少　粗砂：少	良	磨耗により調整不明	
27	C－18	B　SI01　上層	蓋？	つまみ径3.6		(3.1)	橙～にぶい黄褐	にぶい黄褐	細砂：有　粗砂：有　礫：少	良	ナデ、ハケ後ナデ	ハケ後ナデ
28	C－13	B　SI01　上層	高坏		13.7	(5.9)	浅黄橙	浅黄橙	粗砂：有　礫：少	良	ハケメ後ナデ／磨耗	磨耗
29	C－15	B　SI01　上層	高坏　器台の脚部	基部径4.8		(6.9)	橙褐色	橙褐色	１ミリ前後の砂粒含む	良	風化の為不明	風化の為不明
30	C－8	B　SI01　下層	壺か鉢の台部分		(17.5)	(3.2)			２ミリ前後の礫多めに含む	良	ナデ（不明瞭）	ナデのちミガキ（不明瞭）
31	C－9	B　SI01　下層	甕	16.2		(5.8)	橙	にぶい橙	細砂：少　粗砂：有　礫：少	良	ケズリ	ヨコナデ、ハケメ
32	C－10	B　SI01	鉢	12.6	6.1	9.0	明赤褐	橙	粗砂：有　礫：少	良	磨耗（ミガキ？）	ミガキ
36	D－15	B　北端	須恵器　蓋			(2.3)	灰	灰	粗砂、礫含む	良	ロクロナデ、ヨコナデ	ロクロナデ、ヨコナデ
37	D－35	B　北端	須恵器　無台坏		7.6	(2.5)	橙	橙	礫多く含む、砂粒、微砂粒多く含む	不良	ロクロナデ	ヨコナデ、ヘラ切り
38	C－28	B　北端	甕　口縁	(15.6)		(3.65)	明黄褐色、黒色	橙	海綿骨片、砂粒、微砂粒、礫多く含む	良	ヨコナデ、ハケ	ヨコナデ、ハケ後ヨコナデ
39	C－17	B　北端	土師器　底部		5.2	(2.9)	黒褐色	にぶい橙　黒色	砂粒、微砂粒、礫多く含む	良	指頭圧痕　ハケ目	タテ方向ケズリ　ヘラ削り
40	C－22	B　北端	高坏の脚部			(7.35)	橙	橙	砂粒、微砂粒含む	良	ヘラによるナデ　ナデ	不明
41	C－23	B　北端	高坏の脚部			(5.0)	にぶい黄橙	橙	海綿骨片、砂粒、微砂粒多く含む	良	不明	ハケ　不明
42	D－29	B　SI02　床面	土師器　坏				にぶい橙	にぶい橙	雲母含む		指頭圧痕	指頭圧痕
43	D－34	B　SK05	甕　口縁	(21.4)		(3.4)	浅黄橙	浅黄橙	0.5ミリ前後の砂粒含む	良	ハケメ　ヨコナデ	ハケメ　ヨコナデ
44	D－42	B　SK05	甕		(2.8)	(13.5)	にぶい褐色	にぶい橙	砂粒、微砂粒、礫多く含む	良	ナデ	ハケ　不明
45	C－26	B　SK05	土師器				にぶい黄橙	にぶい黄橙	細砂多く含む、礫少量			
46	D－41	B　SK05	土師器　高坏			(5.0)	橙	橙	粗砂、礫多く含む	良	磨耗の為調整不明	磨耗の為調整不明
47	D－31	B　SK05	土師器　高坏			(5.7)	橙	にぶい橙	粗砂、礫多く含む	良	磨耗の為調整不明	磨耗の為調整不明
48	D－32	B　SK05	土師器　高坏　脚			(1.65)	にぶい黄橙	にぶい黄橙	粗砂、雲母含む	良	磨耗の為調整不明	磨耗の為調整不明
49	D－33	B　SK05	高坏？	(15.7)		(4.0)	橙	橙	礫：少　粗砂：有　細砂：有	良	磨耗	（ナデ or）ミガキ
50	D－30	B　SK05	土師器　埦	(10.4)	6.2	5.9	橙	橙	赤色粒少、白色細砂多２ミリ以上の礫少	良	ハケ後ナデ	ナデ　指頭圧痕
51	C－7	B　SK06	甕	(21.2)		(5.9)	にぶい黄橙	浅黄橙	粗砂：有　礫：有	良	ヨコナデ、ケズリ	ヨコナデ、磨耗
52	C－6	B　SK06	高坏　坏部	(27.6)		(5.4)	橙色	橙色	0.5ミリ前後の砂粒含む	良	ミガキ	ミガキ
53	C－27	B　SK06	小型甕	(11.0)		(3.4)	にぶい黄褐	にぶい黄褐	0.5ミリ前後の砂粒含む	良	ナデ、ヨコナデ	ヨコナデ
54	D－37	B　北側	甕　口縁	17.8		(7.8)	橙	赤褐	0.5～２ミリ大の砂礫含む	良	ハケナデ、ナデ、ヨコナデ	ハケナデ、ナデ、ヨコナデ
55	D－21	B	須恵器　坏	(9.4)		(2.5)	灰	灰	白色細砂多、２ミリ以上の礫少	良	回転ナデ	回転ナデ
56	C－20	C　中央	壺			(10.2)	黄灰系の灰白色	にぶい黄橙	砂粒、微砂粒多く含む、礫含む	良	ハケ、不明	不明
57	C－29	C　P21	甕	(14.2)		(3.5)	明褐色	明褐色	0.5～２ミリ大の砂礫含む	良	ナデ、ヨコナデ	ヨコナデ
58	D－14	C　西側	須恵器　有台坏		10.2	(2.05)	灰	灰	粗砂、礫少量含む	良	ロクロナデ	ロクロナデ　底部：回転ヘラ削り
59	D－25	C　P14	須恵器　壺	(12.8)			灰オリーブ	灰オリーブ	粗砂少量含む	良	ロクロナデ、タタキ	ロクロナデ
60	D－24	C　西側	須恵器　壺		(15.0)	(5.45)	灰	灰	粗砂含む	良	ロクロナデ	ロクロナデ　底部：回転ヘラ削り
61	D－19	C　東側	須恵器　耳				灰	灰	礫、粗砂少量含む		ナデ	ナデ
62～64	D－40	C　東側	土師器				淡橙	橙	礫、粗砂多く含む			ナデ
66	D－23	D　西側落ち込み	有台坏		7.9	(1.75)	灰	灰	微砂粒多く含む	良	ロクロナデ	ロクロナデ
67	D－2	C　P15	須恵器　甕　底部		14.2	(10.8)	灰	灰	0.5ミリ前後の砂粒含む	良	タタキ　同心円状	タタキ　平行
68	D－1	D　西側	珠洲焼　すり鉢			(10.2)	灰	灰	海綿骨片、砂粒、微砂粒含む　礫少し有	良	おろし目、ヨコナデ、波状紋	不明、ケズリ後ヨコナデ
71	C－2	丘陵南裾	壺　口縁	14.3		(6.6)	にぶい黄橙	にぶい黄橙	0.5ミリ大の砂礫含む	良	ハケナデ、ケズリ、ミガキ	ナデ
72	C－3	丘陵南裾	壺	15.9		(17.8)	にぶい黄橙	にぶい黄橙	石英、雲母含　２ミリ以上の礫多	良	ハケ後ナデ指おさえ	
73	C－1	丘陵南裾	甕	14.4		(20.1)	橙	にぶい橙	礫：少、粗砂：有、細砂：少	良	ヨコナデ、ナデ、ハケ	ヨコナデ、ハケ（ナデ？）
74	D－10		須恵器　蓋			(2.4)	灰	灰	２ミリ以上の礫多	良	回転ナデ	回転ナデ、回転ヘラ削り
75	D－4	調査区外　北西	須恵器　蓋	15.4		2.5	橙	橙	２ミリ以上の礫多、赤色粒多	不良	回転ナデ	回転ナデ、ヘラ切り
76	D－5	丘陵南裾	須恵器　有台坏	15.0	10.2	4.7	灰	灰	礫、粗砂多く含む	良	ロクロナデ	ロクロナデ　回転ヘラ削り
77	D－6	丘陵南裾	須恵器　無台坏	13.0	10.4	3.2	灰	灰	礫、粗砂少量含む	良	ロクロナデ	ロクロナデ　回転ヘラ削り
78	D－12	丘陵南裾	須恵器　無台坏	13.6	10.0	3.4	灰	灰	礫、粗砂少量含む	良	ロクロナデ	ロクロナデ　回転ヘラ削り
79	D－13	丘陵南裾	須恵器　無台坏		10.0		灰	灰	細砂少量含む	良	ロクロナデ	ロクロナデ　回転ヘラ削り
80	D－22	丘陵南裾	須恵器　坏				灰	灰	礫、細砂少量含む	良	ロクロナデ	ロクロナデ
81	D－11		須恵器　鉢	(26.4)		(7.9)	灰白	灰	２ミリ以上の礫少	良	回転ナデ	回転ナデ
82	D－3	丘陵南裾	須恵器　甕	(16.4)		(10.6)	灰	灰	0.5ミリ以下の砂粒多く含む	良	同心円状のタタキ、ヨコナデ	カキメ、ヨコナデ
84	C－4	免田一本松	土師器　壺？			(4.2)	にぶい黄橙	にぶい黄橙	赤色粒少、２ミリ以上の礫少	良	ケズリ、ハケ後ナデ	ハケ
85	C－5	免田一本松	土師器　壺　口縁	(14.6)		(3.9)	にぶい黄橙	にぶい黄橙	赤色粒少、海綿骨針含	良	ハケ後ヨコナデ、ナデ	ヨコナデ

第２表　土器観察表

（cm・g）

挿図番号	実測番号	出土地点	器種	最大長	最大幅	厚さ	重量	挿図番号	実測番号	出土地点	器種	最大長	最大幅	厚さ	重量
17	石－3	A　SD01	石錘	5.8	5.2	15.2	50	35	石－7	SI01　周溝上面	台石	11.7	11.65	6.9	1196
18	石－4	A　SD01	台石	21.5	16.1	8.5	4028	65	金属－2	C　包中央	刃器	3.55	2.4	0.4	5
19	金属－4	A　中央包	鉄鎌	(4.05)	(1.6)	0.7	4	69	石－1	試掘坑3	石錘	9.4	5.7	2.85	138
20	金属－3	A　壁面中央	ノミ	6.8	1.9	0.35	12	70	石－2	試掘坑3	石錘	7.8	6.05	1.39	88
33	石－6	B　SI01　下層	軽石	3.65	3.15	2.4	4	83	木－1	丘陵西側(裾)　表採		24.9	6.4	1.0	
34	石－5	B　SI01　下層	軽石	5.7	4.8	3.5	14	86	金属－5	免田一本松　SD01	鉄鍋		(3.8)	(0.5)	

第3表　石器、金属器、木器計測表

引用・参考文献

岡野秀紀ほか　2002　『御館館跡』押水町教育委員会

押水町史編纂委員会　1974　『押水町史』押水町役場

押水町史編纂委員会　2001　『押水のあゆみ』押水町役場

垣内光次郎ほか　1994　『紺屋町ダイラクボウ遺跡』石川県立埋蔵文化財センター

川畑誠・安英樹　1994　『正友ヤチヤマ窯跡』(財)石川県埋蔵文化財センター

加藤三千雄　1987　「高松町・押水町入会東間坂手山遺跡出土土器の資料再紹介」『石川県考古学研究会会誌』第30号　石川考古学研究会

北野博司ほか　1987　『宿東山遺跡』石川県立埋蔵文化財センター

嵯峨井亮・村井一郎　1969　「石川県押水町紺屋町ホンデン遺跡調査報告」『石川県考古学研究会会誌』第12号　石川考古学研究会

嵯峨井亮・村井一郎　1970　「押水町紺屋町ホンデン遺跡調査報告（第二次)」『石川県考古学研究会会誌』第13号　石川考古学研究会

谷幸信・西野秀和　1976　「羽咋郡押水町竹生野トリゲ山遺跡」『石川県考古学研究会会誌』第19号　石川考古学研究会

西野秀和ほか　1991　『押水町冬野遺跡群』石川県立埋蔵文化財センター

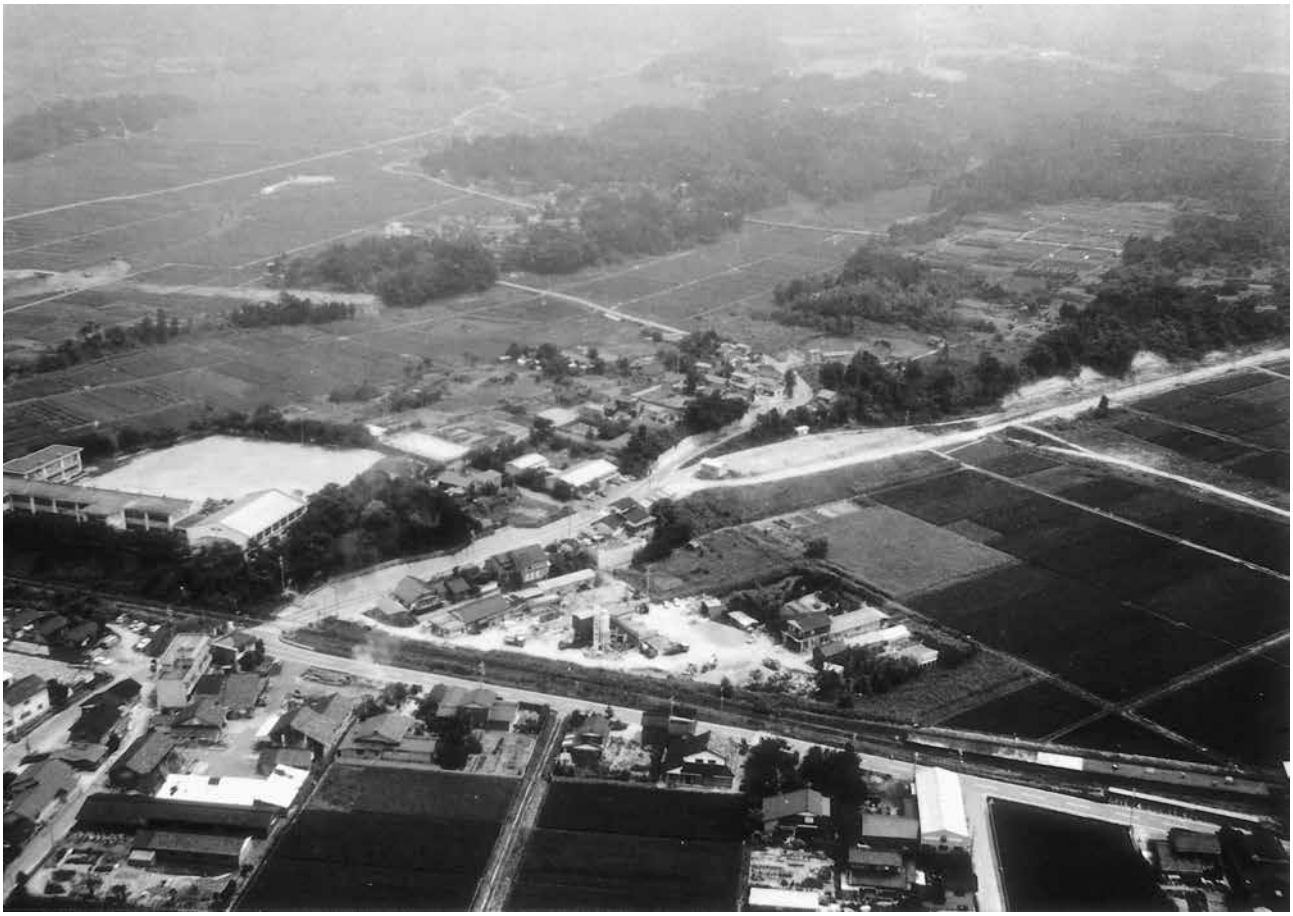
松山和彦ほか　2000　『押水町紺屋町七十苅遺跡』(財)石川県埋蔵文化財センター

三浦純夫ほか　1988　『竹生野遺跡』石川県立埋蔵文化財センター

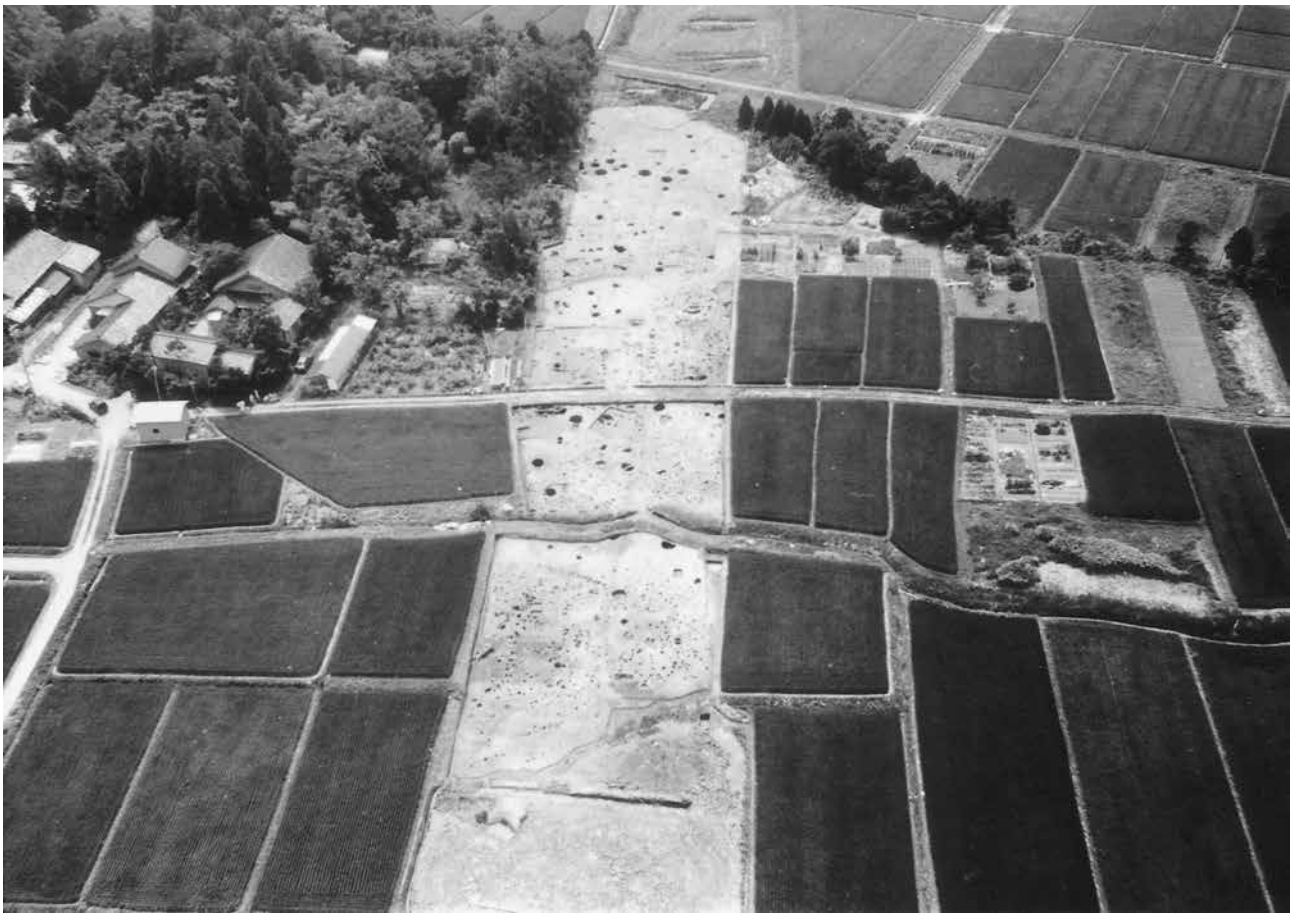
村井一郎　1966　「羽咋郡押水町北川尻オサノ山遺跡」『石川県考古学研究会会誌』第10号　石川考古学研究会

村井伸行ほか　1989　『末森城跡』押水町教育委員会

米沢義光ほか　1987　『宿向山遺跡』石川県立埋蔵文化財センター

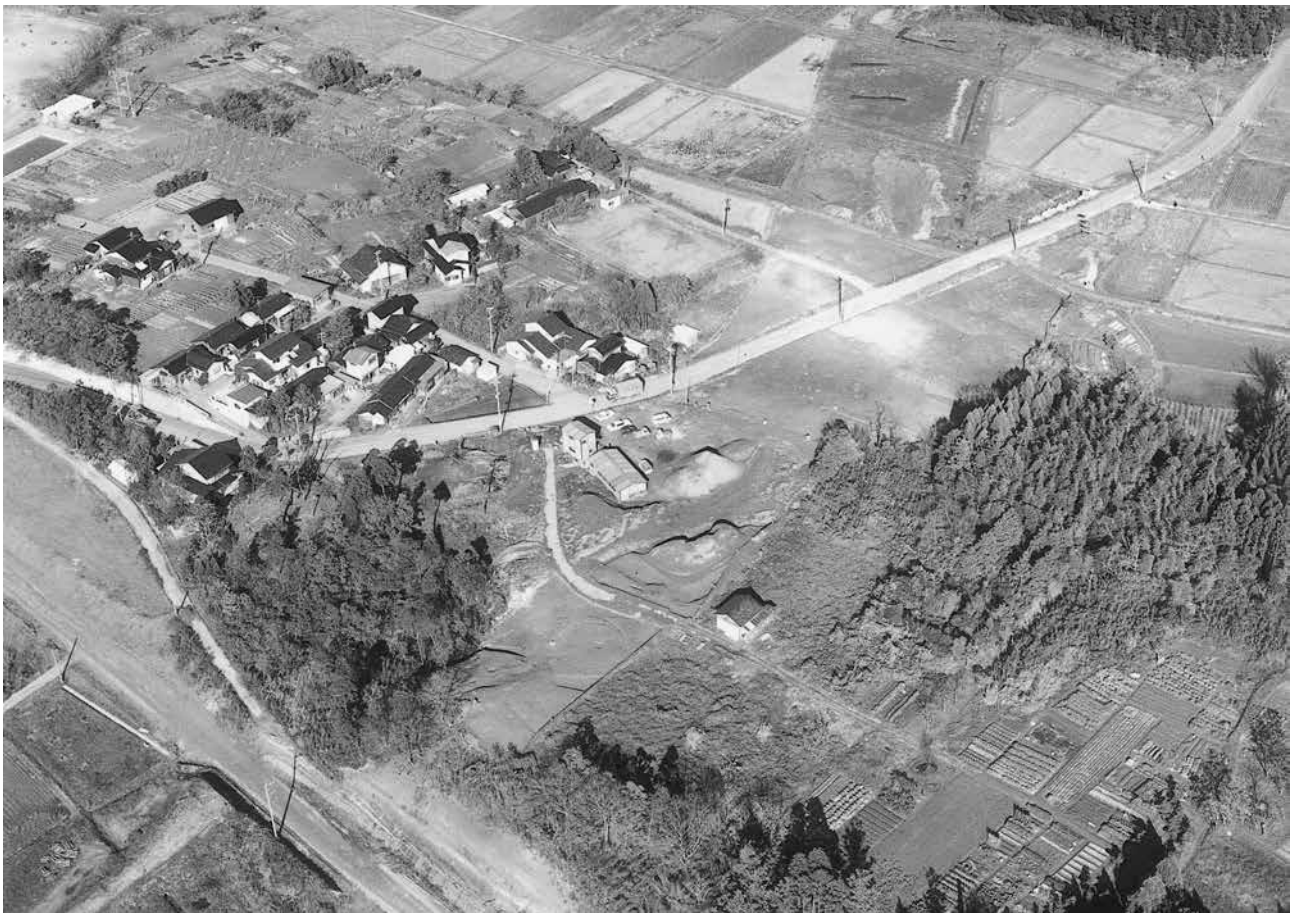


冬野遺跡・免田一本松遺跡（昭和61年）



冬野遺跡（昭和61年）

冬野遺跡（昭和61年）



免田一本松遺跡（昭和61年）

冬野遺跡Ａ区（西から）

冬野遺跡Ａ区（東から）

冬野遺跡Ｂ区（南から）

冬野遺跡Ｂ区（南側）（北から）

冬野遺跡Ｂ区（北側）（北から）

冬野遺跡Ｃ区（東から）

冬野遺跡Ｄ区（東から）

免田一本松遺跡（東から）

免田一本松遺跡（西から）

冬野遺跡Ａ区調査前

冬野遺跡Ｂ区調査前

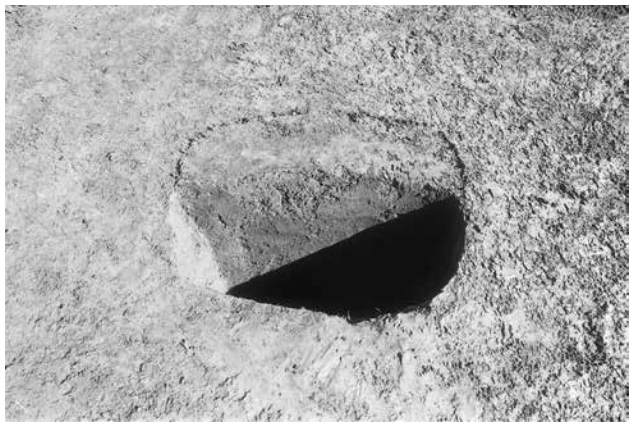
冬野遺跡Ｃ区調査前

冬野遺跡Ｄ区調査前

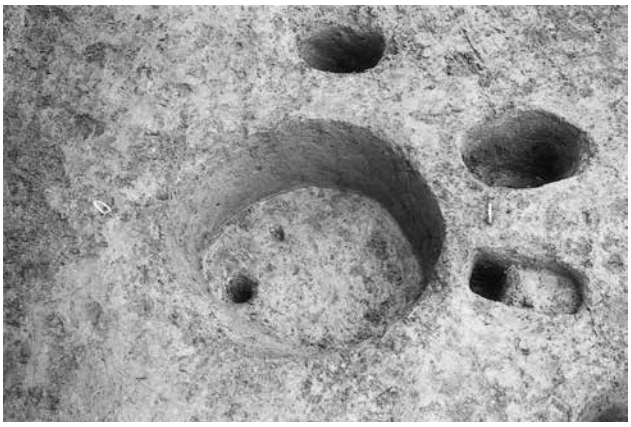
A 区 SD01

A 区 SD01土層

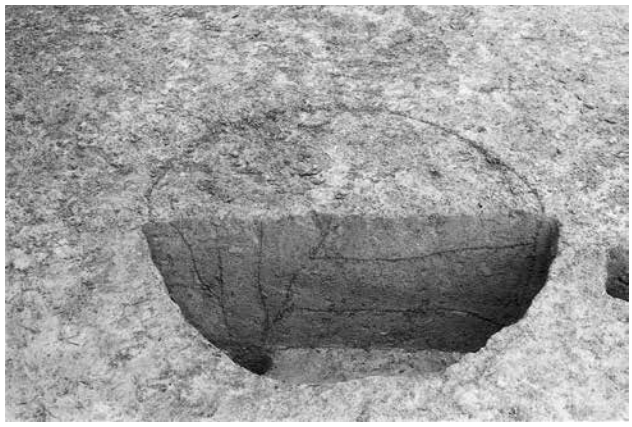
A 区 SK01



A 区 SK01土層

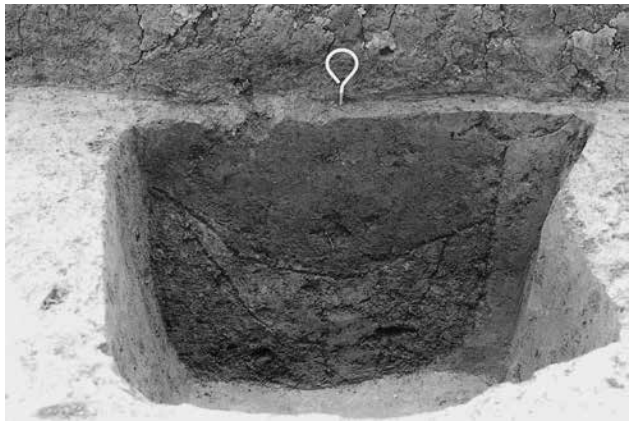


A 区 SK02土層



A 区 SK02土層

A 区 SK03



A 区 SK03土層

A 区 SK04

A 区 SK04土層

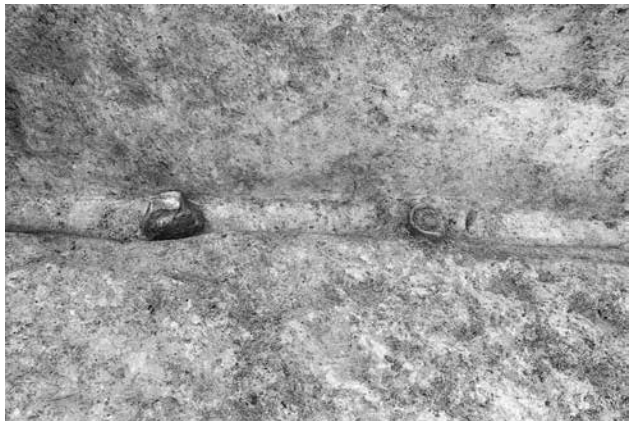
A 区 SK09

A 区 SX01

B 区 SI01床面

B 区 SI01床面

B 区 SI01



B 区 SI01壁溝内遺物

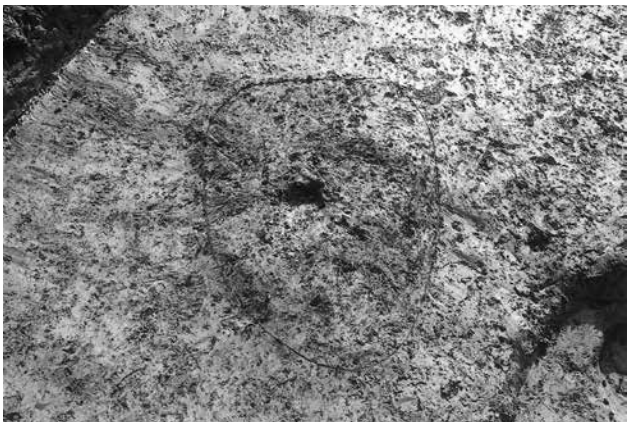
B区 SI01床面下面

B区 SI01土層

B区 SI02

B区 SI03

B区 SI03焼土面

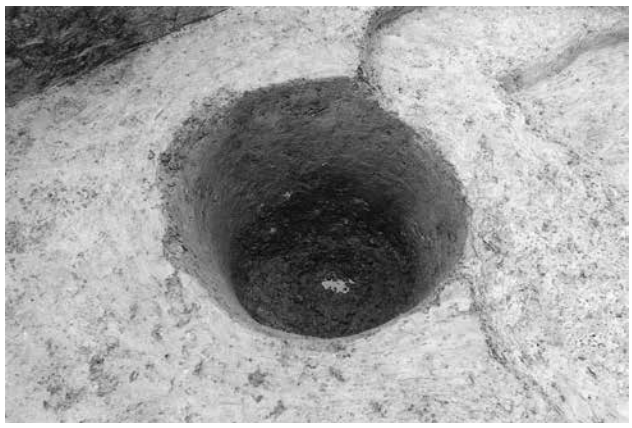


B区 SI03焼土面

B区 SK05

B区 SK07

B区 SK08

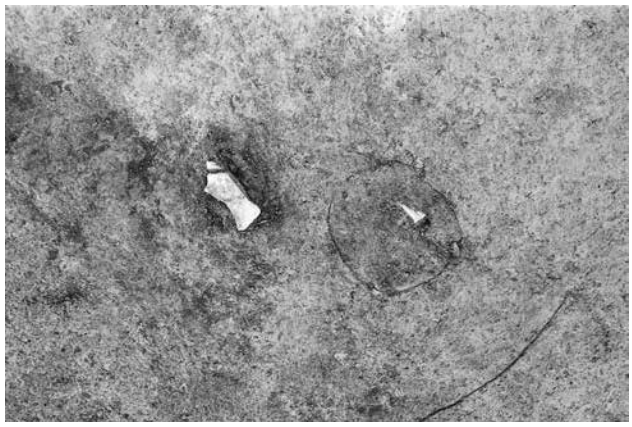


B区 SK10

B区 SK06

B区 SK06土層

C区作業風景

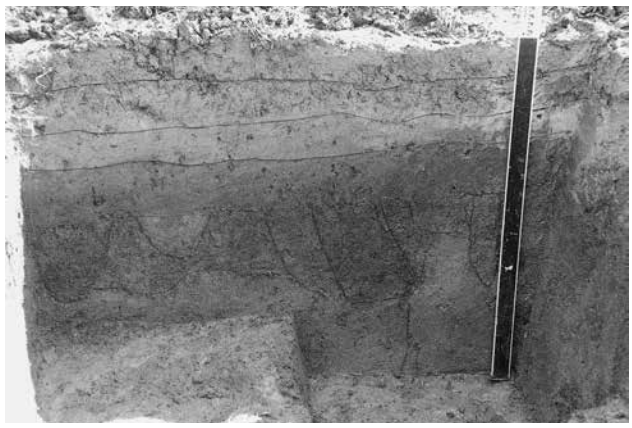


C区出土遺物

D区作業風景

試掘調査作業風景

調査区から望む宝達山



試掘抗 NO. 1 土層

試掘抗 NO. 2 土層

試掘抗 NO. 3 土層

免田一本松遺跡より望む冬野遺跡

冬野遺跡丘陵裾土器出土地点

冬野遺跡丘陵裾土器出土地点

冬野遺跡丘陵裾土器出土状況

免田一本松遺跡調査前

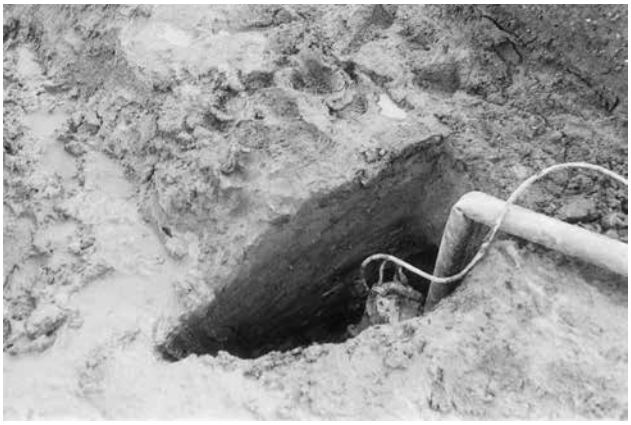
免田一本松遺跡表土除去作業

免田一本松遺跡作業風景

免田一本松遺跡作業風景

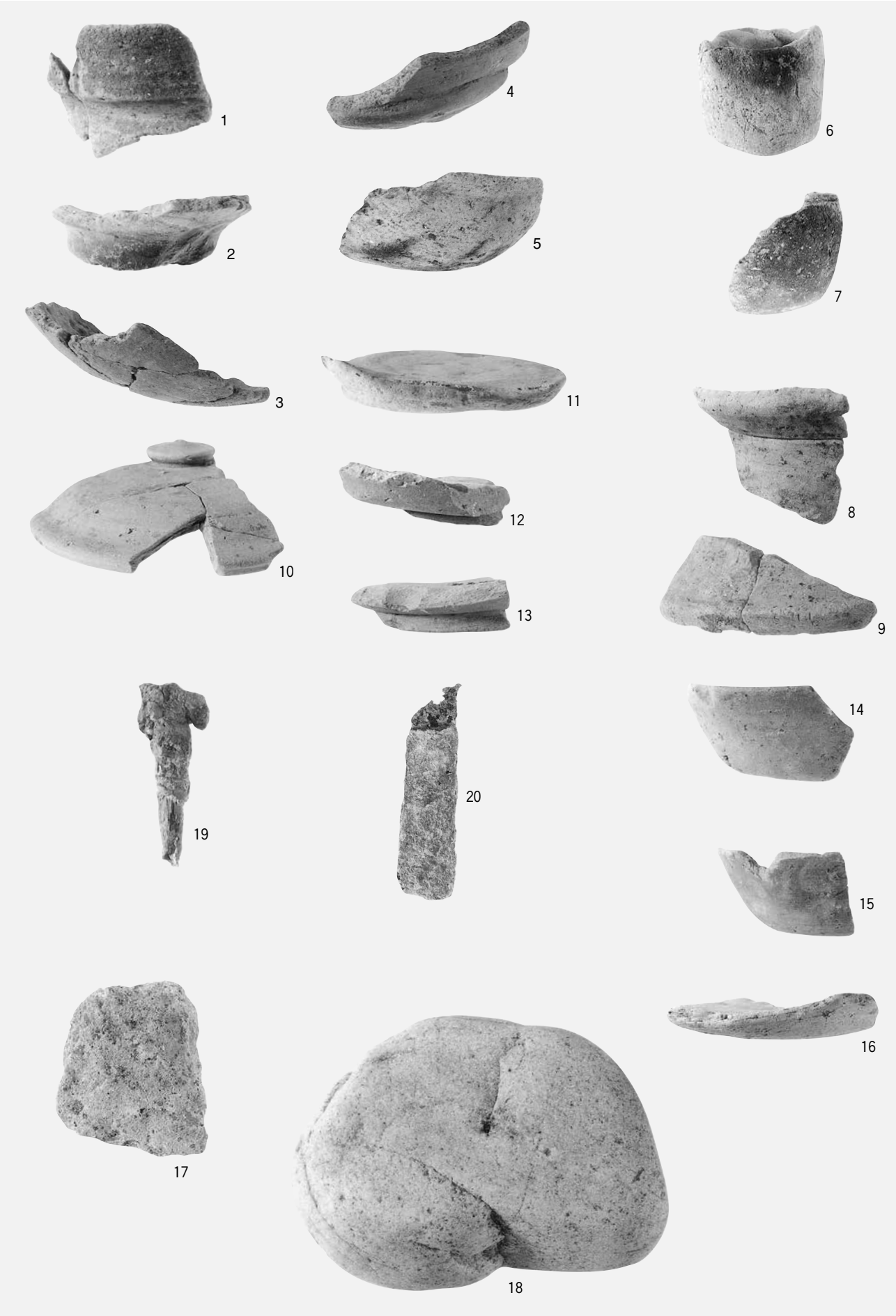
免田一本松遺跡調査区

免田一本松遺跡調査区土層

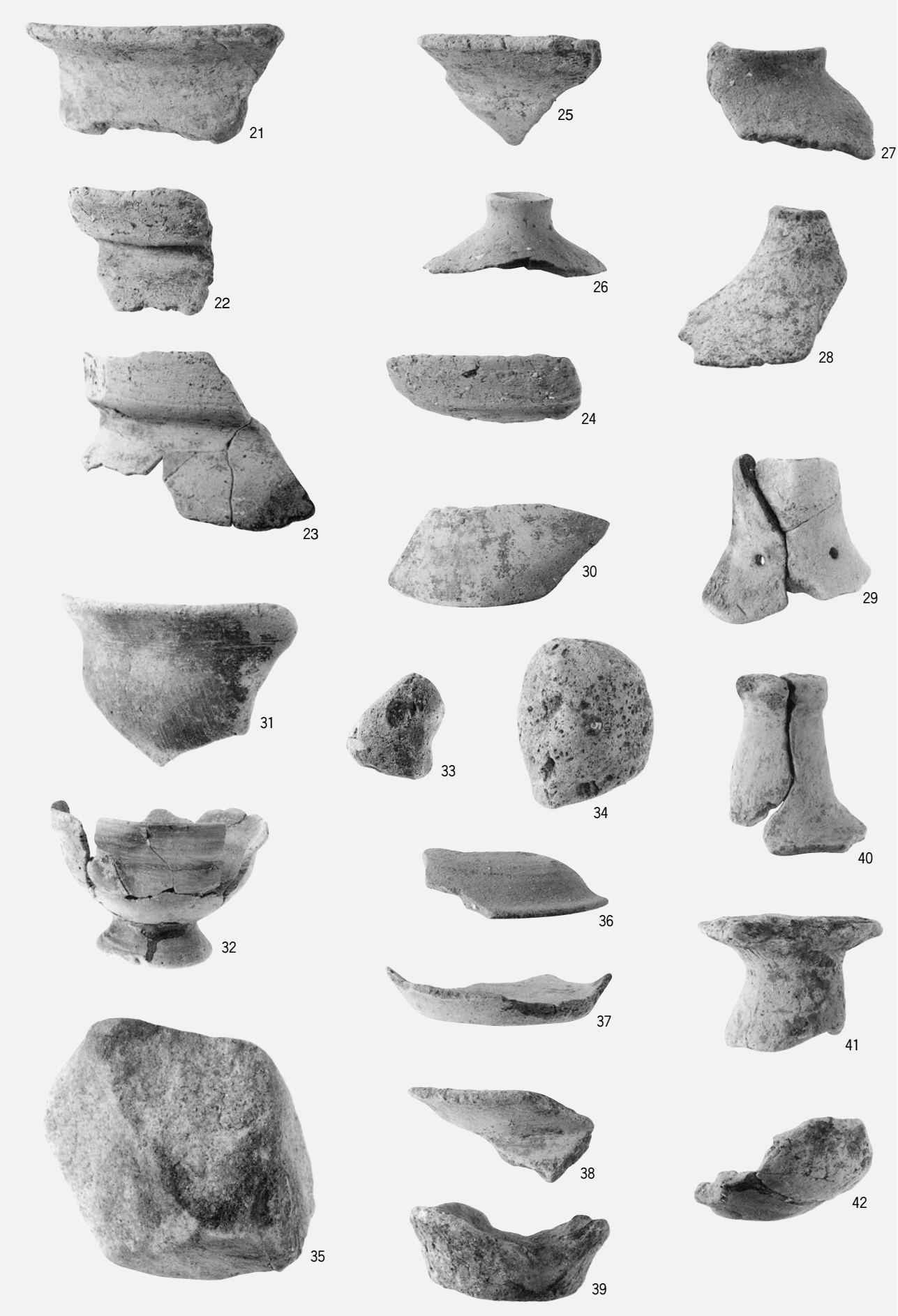


免田一本松遺跡 P01土層

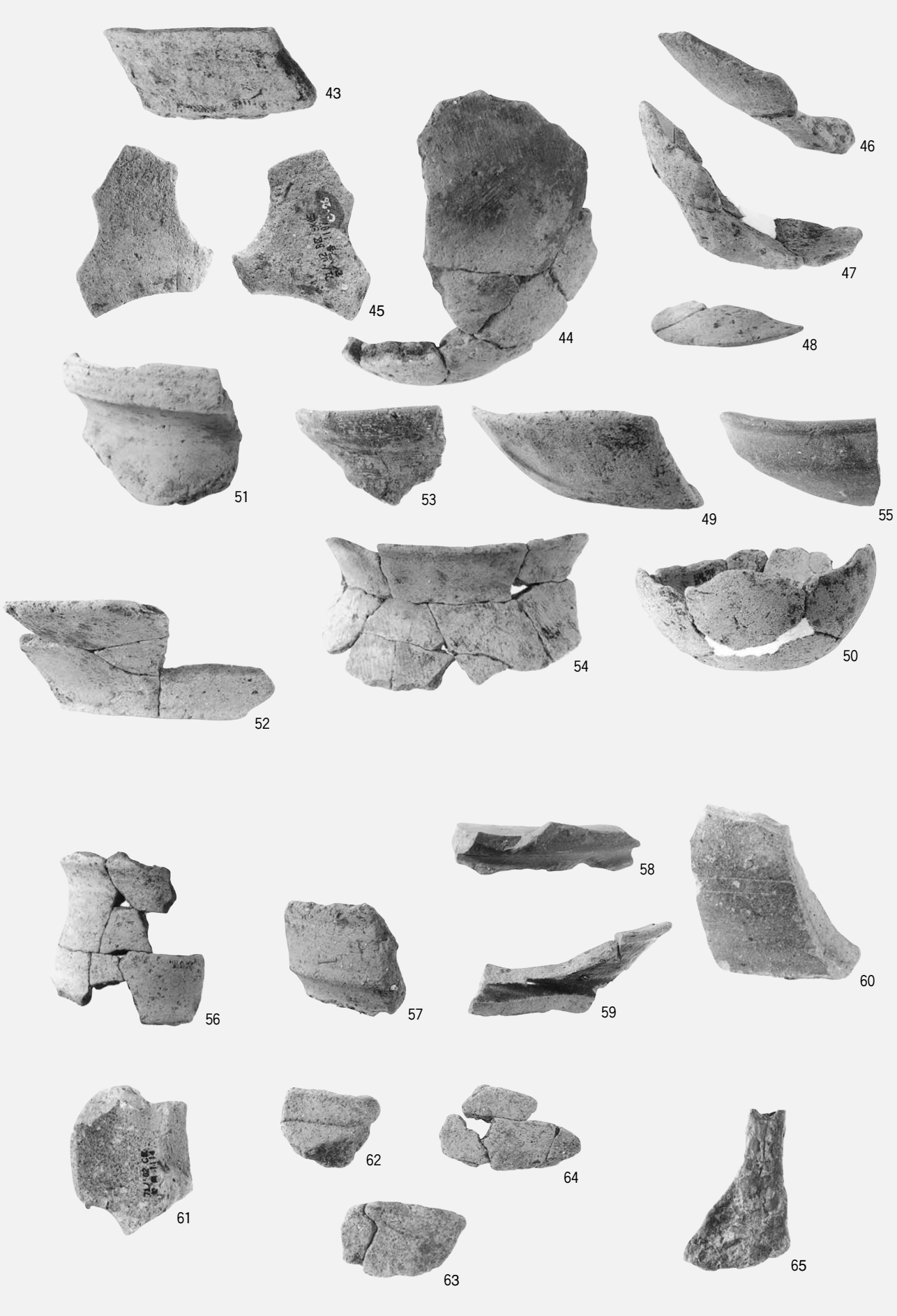
免田一本松遺跡 P01



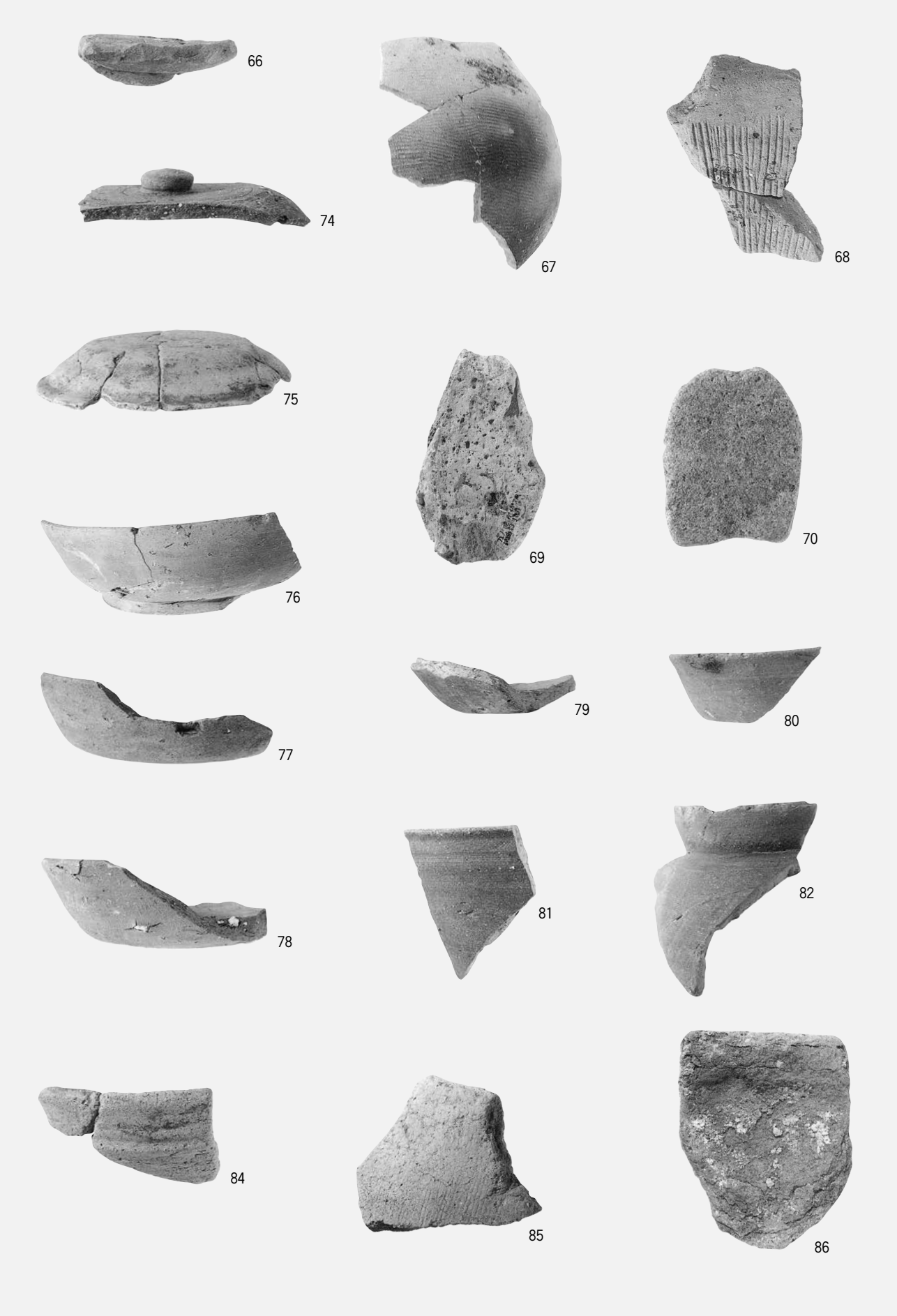
出土遺物(1)



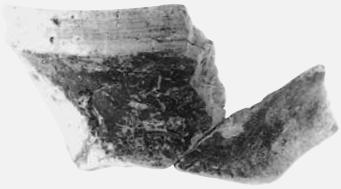
出土遺物(2)



出土遺物(3)



出土遺物(4)



71

72

73

83

出土遺物(5)

報 告 書 抄 録

ふ り が な	ほうだつしみずちょうふゆのいせき・めんでんいっぽんまついせき
書　　名	宝達志水町冬野遺跡・免田一本松遺跡
副 書 名	県営ほ場整備事業（北大海地区）
巻　　次	
シリーズ名	
シリーズ番号	
編 著 者 名	本田秀生
編 集 機 関	財団法人石川県埋蔵文化財センター
所 在 地	〒920‐1336　石川県金沢市中戸町18番地１　TEL 076‐229‐1560
発 行 機 関	石川県教育委員会・財団法人石川県埋蔵文化財センター
発行年月日	2005年３月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所 在 地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査 原因
		市町村	遺跡番号					
ふゆのいせき 冬野遺跡	ほうだつしみずちょう 宝達志水町 ふゆの 冬野	173860	30018	36度 46分 50秒	136度 45分 34秒	20020918 ～ 20021224	510㎡	県営ほ場整備事業（北大海地区）
めんでんいっぽんまついせき 免田一本松遺跡	ほうだつしみずちょう 宝達志水町 ふゆの 冬野	173860	30014	36度 46分 27秒	136度 45分 31秒	20021126 ～ 20021210	200㎡	県営ほ場整備事業（北大海地区）

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
冬野遺跡	集落跡	縄文時代	落し穴	石器	楕円形を呈する落し穴を３基確認した。
	集落跡	弥生時代	竪穴住居跡、土抗	弥生土器、石器	大形の円形ないしは多角形を呈する竪穴住居跡を確認した。
	集落跡	古墳時代	竪穴住居跡	土師器、石器、鉄器	コーナーに焼土面を持つ竪穴住居跡の残欠が検出された。
免田一本松遺跡	集落跡	弥生時代	土抗		丘陵から低地部への移行点で貯蔵穴と思われる土抗を確認した。

要　　約	冬野遺跡 　丘陵緩斜面に位置する縄文から古代の遺構、遺物を確認した。縄文時代では落し穴が確認され端を捉えた。縄文時代では落し穴が確認され狩猟の場であったことが理解される。弥生時代では大形の竪穴住居跡が発見され、それなりの規模を持つ集落跡が想定できる。古墳時代では竪穴住居跡残欠が確認され、集落内に竪穴住居跡の存在が確認できた。 免田一本松遺跡 　丘陵から低地部への移行点で貯蔵穴と思われる土抗を確認した。貯蔵穴が低地部に分布する可能性を示唆する資料と思われる。

宝達志水町　冬野遺跡・免田一本松遺跡

発行日　平成17（2005）年３月31日

発行者　石川県教育委員会
〒920 - 8575　石川県金沢市鞍月１丁目１番地
電話　076 - 225 - 1842　（文化財課）

財団法人石川県埋蔵文化財センター
〒920 - 1336　石川県金沢市中戸町18番地１
電話　076 - 229 - 4477
E-mail address　mail@ishikawa-maibun.or.jp

印　刷　福島印刷株式会社